

成·壽

SEIJU

2009年
第40卷

冬 野



沙門
二喜
卷



沙門 志 茂 畫





辞令交付を受けるリン・コ・ヒアン氏

■
特
集

開山忌

育英会報恩供養
第二十二回 育英会辞令交付式





育英生による報恩供養 導師 安藤嘉則理事







平成二十一年二月十三日、釈迦殿には、関係のご寺院様、檀信徒総代、親類縁者をはじめ、総勢八十名ほどのゆかりの方々が集い開山忌「椽庵白純大和尚」の法要が執り行われました。本寺光真寺ご住職、黒田俊雄老師に導師をお勤め頂き、併せて、三年ぶりに横浜善光寺留学僧育英会も再開され育英会報恩供養と第二十二回育英会辞令交付式も執り行われました。

育英会報恩供養は同理事の安藤嘉則老師にお勤め頂き、留学僧育英会初代理事長である大圓武志大和尚の多大な功績を改めて参列した皆さんで偲びました。辞令交付式では、先代の強い意志を引き継いで、新たな決意のもと育英会理事長となられた黒田博志住職が執り行いました。

また留学僧選定の経緯は安藤嘉則理事によってなされ、次の二名が紹介されました。一名はアゼルバイジャン出身、アイーダ・ママドワア



アイーダ・ママドゥア氏（1月29日不動殿にて）

氏（現在、金沢大学医学部博士課程に所属）、
仏教を通じた宗教的医学を専攻している二十四
歳の女性です。アイーダ氏は式当日、インドに
いるため出席できないという事情もあり、去る
一月二十九日、善光寺の不動殿において辞令交
付を終えています。

もうお一方が、マレーシア出身、リン・コ・
ヒアン氏（三十四歳、男性）。駒澤大学大学院
修士課程に所属し、仏教学を専攻しています。
黒田博志理事長から辞令交付がなされ、ご臨席
の皆さまより激励の拍手で新たな門出が祝福さ
れました。

さらに、黒田俊雄老師のお言葉へと続き、ご
自身の海外活動や世界平和に対する思いを語ら
れるとともに、博志住職の活躍ならびに先代の
奥さまのご貢献に敬意を表されました。

続いて博志住職の挨拶。武志大和尚が亡くな
られたのち五回目となる開山忌を迎えることが



できたこと、ならびに育英会再開にあたりご緑のあつた方々、ご尽力くださった方々への感謝の意を述べられました。

締めくくりは安藤嘉則理事によって、かつて留学僧に任命された方々から、育英会の再開に際してたくさんのお便り、礼状が届いたことが伝えられ、その一部が紹介されました。いずれも、とても温かくお心のこもる文面で、育英会の存在意義がいかに大きなものであるかを窺い知ることができました。博志住職の英断により、さらに多くの留学僧が選出され、ご活躍されるであろうという希望の光が、釈迦殿に満ちた瞬間でもありました。

訃報

善寶寺四十一世 劫世信義大和尚遷化



今年六月に善光寺参拝団で拝登した折りのお元気なお姿

大本山總持寺副貫首齊藤信義老師様が十一月二十六日、世寿九十一歳で遷化されました。

老師は東京帝国大学文学部印度哲学科を卒業後、鶴岡工業高等専門学校校長、長岡技術科学大学副学長などを歴任されました。その後、大本山總持寺の監院として十二年間にわたり活躍され、

「三松閣」の建設など山内整備に尽力されました。学徳兼備の禅僧として知られ、その徳望を以て一宗公選により大本山總持寺副貫首に就任されました。

副貫首老師様は横浜善光寺留学僧育英会名誉顧問であり、大圓武志大和尚が生前、親しくご指導を賜りました。そのお陰をもちまして今年六月、善光寺参拝団がご住職地鶴岡市の善寶寺様に拝登いたしました折には、お元気でご懇篤なおもてなしにあずかりました。

ここに、ご生前のご法愛に深謝し、謹んで哀悼の意を表します。

カラ	―■計報・善寶寺四十一世 劫世信義大和尚遷化……………	1
カラ	―■開山忌・育英会報恩供養 第二十二回育英会辞令交付式……………	2
特	集●開山忌 ご挨拶 メッセージ……………	14
カラ	―■山形・善寶寺参拝旅行……………	29
読	物●山形・善寶寺参拝旅行 参加者の感想……………	37
連	載●『普勸坐禅儀』に学ぶ その四……………	49
読	物●死者と生者―施食会にちなんで……………	56
読	物●嘘から出たまこと……………	71
	東郷 敏	
	佐々木宏幹	
	安藤 嘉則	
	善光寺霊園ニュース……………	84
	坐禅会・写経会のお知らせ……………	86
	ニュース・アラカルト……………	92
留学僧募集のお知らせ	100	
読者のたより	104	
編集後記	112	
題字・イラスト	伊藤三喜庵	

巻頭言

善光寺住職 黒田博志

発願利生。

師父大圓和尚は四十年前この地に成寿山善光寺を開創、限られた境内の中で、その隅から隅に順々と伽藍を整え、一歩一歩踏んで、今日の善光寺を遺して参りました。

その師父の背中を追い「師父の存命中はその志を觀。師父没するときはその行を觀る。」を胸になんとか今日まで歩いて参りました。

今年二月には、開山忌に因み第二十二回育英会辞令交付式を執り行なう事が出来ました。三年振りの育英会の再開となり、病床の師父との約束を守ることができた事、誠に感謝の一念です。檀信徒の皆様、関係の皆様方に改めて感謝を申し上げます。これからも一銭一草以って『法輪転ずるところ食輪転ず』世界平和を祈念して続けて参る所存です。

師父の築き上げた善光寺。それは伽藍だけではなく、師父が遺してくれた尊い仏法の伝承教化、素晴らしい人、人材そして有難く篤い檀信徒の皆様とのご縁です。今年は奇しくも開創四十周年。留学僧育英会も設立二十五周年を迎えるに至ります。

師父が開創以来変わらずに、豁然と抱いた理念『宗祖を通して釈尊に還る』。師父を想うに、全く『ゼロからの出発』。草創期の苦勞、艱難は、現代を生きる私の想像をはるかに超えています。食うや食わずではない、食えなかったと聞

かされたことがございます。師父の口へせ、「そのすべは檀信徒各家の皆々さまの尊いご至誠とご浄財のお蔭だと、仏天のご加護に感謝報恩のまことを尽しても尽しても、尚尽し足りない気持ちだ」と言い放つ師父の姿が彷彿としております。

その師父も遷化して早や六年、来年は七回忌法要を迎えます。

師父亡き後、多くの方に助けられ、多くの尊いご縁に導かれ、守られながら歩んでまいりました。師父の七回忌に因み報恩の誠を尽くして『晋山式』を相勤めさせて頂く運びとなります。師父が開基家の御恩に報いんが為に、付けた山号。それがナリスの山、成寿山善光寺です。その『山に晋すすむ』。成寿山の住職としての就任式がこの晋山式です。

私にとりましては『生涯一度』の機会、住職として、僧侶としての更なる責任感に身の引き締まる思いです。

師父の晋山式は、昭和四十七年、十一月二十八日。この時点、私はこの世に『生』

をいただいております。来年十一月二十八日。私もまた一步、師父の跡を踏む所存です。

師父の死と共に突然課せられた私の重責。継承以来、唯唯必至一所懸命に歩んで参りました。

今年一年間も多勢のご縁の方々に支えられ、救われて無事に過ごすことができました。厚く厚く深く深く感謝お礼申し上げます。来年は私にとって、大変革の年、更に一步を進めるべく、精一杯弁道精進致す決意です。

今後とも、ご指導ご鞭撻を何卒宜しくお願い申し上げます。

開山忌

〈ご挨拶〉

育英会復興を喜び

光真寺御住職 黒田俊雄老師

ご指名によりお許しを願ひ、本日留学僧の式典ならびに開山忌の法要を心からお祝い申し上げます。開山の棟庵白純大和尚および二世中興大圓武志大和尚の法要も合わせて執り行うというお話がありまして、本日は導師を勤めさせて頂いたことを感謝しております。

殊に先代の奥様は、寺の存続について献身的にご努力をなさっています。ご実家がお寺であ

るため仏事についてもお詳しいし、非常に肝が座っておりましてね。我々が見習うべきところが多々あるのではないかと、思っております。そのおかげもありまして、博志和尚が武志和尚とほとんど変わらず、実直にお寺の運営をなさっておられることに敬意を表し、武志和尚は本当にいい弟子をお持ちになったと、心からその因縁を喜んでおるわけでございます。

私が白純和尚から学んだことは、どんな宗派の人々でも分け隔てなく受け止め、むしろ他宗



の人を大事にしたことが思い起こされます。仏教会の理事長を務められていたところに多くの宗教と出会い、その間、いささかの摩擦もあったわけですが、同じ仏教を信仰する者同士が手を取り合うべきだと力説しておりました。

そのような白純和尚の度量の深さや、アメリカで禅の布教に尽力された兄弟、前角博雄老師のお姿にも影響を受けたのでしょう、武志和尚もまた、非常に国際感覚に優れておりました。次代の人材を作ることが世界の宗教や平和のためになると念願して、育英会をお作りになった実行力は素晴らしかった。その偉業を継いで博志和尚が育英会を復興し、留学僧の支援に取り組みむと覚悟されたことが大変うれしくもありますし、また、亡くなった武志和尚も非常に喜んでおられると思います。

そして人材育成を図る上で何が大事かというところ、やはり平和ではないでしょうか。私はいま、



カンボジアに毎年一校ずつ学校を新設したり、タイのスラムの子どもたちへの募金を行うなど、東南アジアで教育を援助する活動にかかわり、現地にも足を運んでいます。カンボジアに初めて行ったときは、内戦下において文化人の多くが犠牲となっていた状況でした。そんな中で心が萎縮してしまい、黒一色の色使いで蟻のような人物画しか描けない子どもたちの有り様を目の当たりにして、平和な社会の下で教育や文化がはぐくまれることの大切さを痛感しまし

た。

二十一世紀になって、世界平和のために、仏教徒としても自他の偏見をなくし、お互いがお互いを尊敬し合うという生き方や、誠を持って働いている人々が救われるのだという考え方を広めていかなければなりません。また私たち日本人は、いにしえより「大和（やまと）」の精神を受け継ぎ、そして、戦争を放棄した民族でもあります。皆の心の中に平和の火を灯し、世界へと発信することができるのは日本人にほかならないのであり、天から授かった民族の使命ではないかと思っています。

ここに育英会の存在と価値があります。どうぞそんなことを一つ心にお留めいただいて、このような法要にもご参列いただければありがたいと思います。心から御礼を申し上げて、挨拶に代えさせていただきますと思います。ありがとうございます。



育英会は使命であり支柱

善光寺住職 黒田博志

本日はお忙しい中、開山忌ならびに第二十二回横浜善光寺留学僧育英会辞令交付式に、ご臨席賜りまして、誠にありがとうございます。育英会は三年ぶりに再開をさせていただきましたが、光真寺の御前様には、この会の名誉顧問もお勤めいただいております。また、師匠が亡くなって開山忌は今年で五回目となり、焼香師を毎年、快くお受けいただいておりますことを、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

これまで、ご縁をいただきました育英会の皆様方、殊にご導師をお勤めくださいました安藤嘉則先生には、この育英会を再開するにあたり

ご尽力を賜りましたことを、厚く御礼申し上げます。

この育英会は、先代住職、初代理事長が、この寺の十五周年を記念して設立した会で、最初



は、「善光寺海外留学僧派遣育英会」という名称で始まりました。師父は若かりしころ海外で広く修行生活を送り、その時分、尊い仏縁を頂戴したことから、次代を担う若い方にもそういった経験をして、世界の仏教界へ貢献していただきたいという思いが発願であり、育英会の原点でございます。

師父は、亡くなるまでの二十一年間休むことなく続けてまいりましたけれども、突然の遷化によつて休会を余儀なくされました。あのときは途方に暮れ、本当に何をしたいのかもわからない状態でした。病床を見舞った私に対して、師父はこう告げておりました。

「博志、育英会は善光寺の使命であり、支柱である。たとえ留学僧の選定枠を一人に減らすことになろうとも、博志の代になっても続けてほしい。頼む」と――。

師父から託された言葉を三年間しっかりと胸の

中に抱き、寺の継承に全力を注ぎつつ準備を進め、本日お集まりの皆さま方や、檀信徒の皆様方の絶大なるご支援、ご教導のおかげで、育英会も無事に再開することができました。念願叶い二十二回目は、新たに、お二人の立派なお方に留学僧としてご縁を頂戴しましたことを、最高にうれしく思っております。

私はまだまだ若輩でございます。とにかく精一杯、精進してまいりたいと思っておりますし、この育英会が師父への報恩となり、少しでも安心して喜んでいただければと願う次第です。今後とも皆様方にご指導、ご教導いただきますことを深くお願い申し上げます。御礼の挨拶とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

当日寄せられたお礼状をここに抜粋して掲載させて頂きます。

温かく心のこもった文面の数々

第一回留学生 田中智誠様

貴山開山忌並びに第二十二回留学僧の辞令交付式のご案内に接し、誠に慶ばしく法幸至極に存じ上げます。

仏道の国際交流へ向けられた黒田武志老師の願行を絶やすことなく継続再開されることは留学僧の一人として大変うれしく存じます。貴会の益々のご発展を念じます。

小納儀、黄檗山第五代高泉禪師語録全集の編纂に取り組んで早や十年となり、ようやく本二〇〇九年度中で刊行の予定です。

右、略儀乍ら祝詞にかえ近況報告まで。

第二回留学生 河内義宣様

留学僧による報恩供養すばらしい企画をしていただき忝なく存じます。

本来なら当然御焼香させていただかねばなりません。が所用にて失礼をさせていただきます。また何か追悼の言葉とかいいますが、私も多くの方達が述べられておりますので、私の近況として寺報別便にてお送りさせていただきます。

合掌

第三回留学生 磯村啓子様

御手紙頂戴致しました。

安藤様のご発展、誠に良きことと存じ上げます。しかし乍ら当日は仕事（学校）が入っております。誠に申し訳ございません。

先代方丈様には大変良くして頂き大変感謝致しております。この度三世方丈様が育英会の再

開を決意されましたことを大変嬉しく存じます。先代様の御意志を大事にしまして、私も教育の現場で頑張つて参りたいと存じます。

育英会の今後の益々の御発展を心より祈念いたしております。

第四回留学生 星宮智光様

いつもご指導ご支援下さいまして感謝申し上げます。星宮智光のことですが、昨秋より脳梗塞を発症し現在は、入院、リハビリの身となつてしまいました。

意思の疎通もままならず、気持ちを確かめることが十分に出来なくなりました。

元気でおりましたら、きつと何かをお伝えできるとは存じませんが、まことに残念でなりません。

どうぞこれからの育英会の益々のご発展お祈

り申し上げます。不躰な文面お許し下さいませ。

(一子様代筆)

第五回留学生 引田弘道様

留学僧育英会事業の再会、誠におめでとうございます。御招きを頂き、前住職のおまいりに参じようと思いましたが、あいにく、入試監督の為、それが出来なくなりました。

思えば二十年前、私が留学僧として選ばれ、オックスフォード大学におりましたとき、前住職が奥さま共々、激励に来て頂いたことを今でも鮮明に憶えています。

また、愛知学院大学に学んできた多くの留学僧も本育英僧に認めてもらい貴重な学資とさせて頂きましたこと、感謝の念にたえません。現在彼らは本国に帰って大学の研究員や教授として活躍しております。これもひとえに善光寺様のおかげと思えます。

現在、日本の経済はとても悪く、本育英会事業も大変だと存じます。現任職黒田博志方丈の御英断にただただ頭が下がる思いです。

私も及ばずながら御協力させて頂きたいと考えております。育英会の益々の発展を祈念します。

第五回留学生 山本浄月様

吉報を拝受いたしました。

横浜善光寺留学僧育英会が理事長様の故黒田武志老師のご遷化により一時休会しておられましたがこの度善光寺三世黒田博志方丈様ご英断により再開されるとの報に本当に心よりの喜びを申し上げます。

思いおこせば私共留学僧は育英会の前理事長黒田老師様のおかげで海外の仏教僧院や教育機関に於いて大変貴重な体験をさせて頂きました事、又その折のいくつかの海外各地への行脚も

含めて世界の三大宗教の一つと位置づけられている現代の仏教の姿をつぶさに垣間見る事が出来ました事、何よりの私の生涯の財産ともなるものと深く感謝の念を抱いています。この体験は私個人だけではなくもっと広く何らかの形で世のため人のため仏教徒としての使命につなげてゆくものにならなければならないと思っています。

釈尊の教えに従いすべての原点に立ちかえってその本質をはっきりと見てゆく事、そしてあらゆるもののおかげ様ですべての命がある事、体験を通じて報恩の感謝と共にこの地球上に同時代に生き合せた仲間として共に命あるものとして生きてゆく事を大切にしたいと思います。

今回の横浜善光寺様のご活動、ご活躍の益々の御発展を祈念し微力ながらその御志の一端でも報いる事が出来ればと念願しています。

私事ながら市井の片すみの荒れた草庵に住して以来、有形無形の寺の復習を志しながらほんの一步ずつでも生きている限りは努力を続けてゆくつもりでいます。

第六回留学生 沖田玉映様

この度は善光寺留学僧育英会が再開されうれしくお慶び申し上げます。

本日の式典に出席叶わず、申し訳なくお許しくださいませ。

黒田武志老師様！ どうして、兄の前角老師を追うが如くに、こんなにも早く逝かれてしまったのでしょうか？

御影のニツコリ微笑んだお写真を拝む時、「沖田どうしたー」「沖田ガンバレ」といつも励ましてくださったお声が今も生前と変わりなく小尼には響き聞こえて参ります。

アメリカ禅センターZCLAにお世話に成り

ました折、日本よりお盆の超忙しい中、「車の中でこの手紙を書いています」との黒田老師様からの手紙を拝受し自分のことより他の者を思い遣うお優しい慈愛に満ちたお心を今でも忘れることが出来ません。

人のお世話をすることがどれだけ大変なことか教えられました。

どんなにか黒田武志老師様、倫子夫人にはお世話になって来たことか。その恩を微力ながら還元しなくてはと肝に銘じて修行して居ります。

何を書いたら好いか言葉足らずで申し訳ございません。

末筆ながら当育英会、並び横浜善光寺様の益々のご盛隆を祈念申し上げます。

第十回留学生 碓雄神様

この度はお世話様です。

前理事長の余りに早すぎる御遷化は本当に残念

念ではあります。育英会の再開は誠に有難い知らせでありました。

今回の辞令交付式にはどうしても都合がつけられず失礼させて頂きますが、いつも現在の自分の核に留学僧としてテラワダ修行させて頂いた体験があることを感じ、前理事長に感謝せずには居られません。

一介の天台宗僧侶である私がある後ブツダガヤ日本寺駐在僧としてインドに渡った時も、この体験がいかに役に立ったでしょう。

現在は日本のお寺を拠点にしつつ、アジア仏教との交流を基に「アジアのお坊さん」というホームページを開設させて頂いています。

黒田老師、よくぞ私をタイに行かせて下さいました。本当に本当に心より感謝致しております。決して怠らず精進致したく思います。

第十一回留学生 宇野恭章様

立春の候、皆様におかれましてはご健勝のこととおよろこび申し上げます。過日は開山忌並育英生辞令交付式にお招きいただきましてありがとうございます。

私は一九九三年から九八年までの五年間をインドのカルカタで過ごしました。この五年間は、私の人生の中で最も有意義で貴重な時間でした。学問的なことはもちろんですが、人間が生きていくうえで何が本当に大切なのかを学ぶことが出来たような気がいたします。

私は仏教学を専攻していましたが、現在も僧籍を持っておりません。前理事長黒田武志老師には帰国後の進路についてもご心配をお掛けいたしました。ご挨拶にお伺いするたびに「ちゃんと生きてますか？」と優しいお言葉をいただきました。人を思う心、思いやりにあふれたお顔が目には浮かびます。

現在私は京都のザ・パレスサイドホテルとい

うところで営業の仕事をしていただいております。仏教とは直接関係のない仕事ではございますが、毎日が勉強であるということは、育英生であった時と変わりはありません。いつも感謝の気持ちと笑顔を心掛けております。国際都市京都には世界中の人々が訪れます。また世界には様々な宗教がございます。折に触れ、人々を思う心、真理を説く仏の教えは普遍的なものであると実感しております。

この度は仕事の都合上、出席することが出来ませんが、自らの持ち場に責任を持ってしっかりと努めることも前理事長老師のご恩に報いることと信じます。お許し下さいませ。別の機会に必ずご挨拶にお伺いいたします。今後ともご指導の程宜しくお願い申し上げます。

再開されました横浜善光寺留学僧育英会のご発展を心よりお祈り申し上げます。

第十二回留学生 清水晶子様

横浜善光寺留学僧育英会が黒田博志方丈様檀信徒としてご支援の皆様のご尽力によって再開されることを伺いました。心よりお慶び申し上げます。

私は善光寺様ご支援のもと第十二回派遣育英生としてイギリスのケンブリッジ・ロンドン両大学において勉強する機会を与えていただきました。長くかかりました二〇〇七年十二月に正式にロンドン大学にインドの首都デリーにあるジャイナ教徒のコミュニティに関する研究テーマでPhD論文を提出しました。

黒田大圓先生が亡くなられて四年目と伺いました。一時帰国した際にごあいさつに伺ったときには亡くなられた阿部慈園先生とご一緒にカラオケに連れて行っていただき励ましのお言葉をいただいたことを懐かしく思い出しております。

イギリスという世界各国から研究者、学生達の集う研究施設の充実した地でインドの宗教を学びさまざまな人々と交流ができましたことはかけがえのない貴重な体験となりました。現在は北九州にありますが東方研究会の役員として研究を続けております。

善光寺様からいただいたご厚情を心にとめて自らの学んできたことを少しづつでも発信していければと思っております。今後ともどうぞ宜しくご教導下さいますようお願い申し上げます。

善光寺様のますますのご発展を心よりお祈り致しております。

第十六回留学生 橋本英樹様

まず、善光寺留学僧育英会の再開をお喜び申し上げます。このたびの開山忌・辞令交付式に随喜できないこと深くお詫び申し上げます。昨

年遷化した師父で先代の先住忌もあり、多忙につき申し訳なく思います。

ここで、黒田武志老師との思い出を少しばかり話させていただきます。四、五年前かと思いますが、福島県の寺院でたまたまお会いし、宿も隣室で、その晩は二人だけでゆっくり食事をしながら、懇談させていただきました。親子ほどの年の差がありながら、ましてやこちらはたいへん面倒を見ていただいている身、それでも出来るだけ対等に接してくださる態度には感服いたしました。その時、老師から「いいか、一大事を成そうと思うなら焦るなよ。大概、失敗する人というのはどうしても拙速になりがちなんだよ。今、目の前のことを地道にこつこつ積み上げていつてごらん。必ず波は起こるよ。チャンスは向こうから自然とやってくるからその時つかめよ。」また、こんなことも、「自分はちよつと事業欲が強すぎたんだよな。」とポツリ

とおっしゃったことも忘れられません。ご老師は本当に正直な寛大な方なんだなあと思いました。住職となった今、時々、老師のことを思い出し、その警咳に接することが出来たことをあまりがたく思います。

私は学業生活が長かったため、今でも他の奨学金の返済に苦勞しておりますが、できるだけ、寄付行為はするようにしております。自分の生活は質素にしても恩返しすることが学業ができたものの勤めと肝に銘じております。妻は家庭的経済的理由により進学できなかったため、自分の小遣いをよく、あしなが育英会、ガザ地区、福祉団体等々に寄付しております。二人の共通の夢の一つに育英会を設立したいというものがあります。これも善光寺育英会がなかったら考えつかなかったことかもしれません。夢で終るかもしれませんが、あきらめずにやっていくつもりです。

最後になりますが、今は亡き黒田老師のご冥福を心よりお祈りし、また貴育英会の益々の隆盛をご祈念申し上げ摺筆といたします。

第十六回留学生 福田智昭様

成寿山 善光寺二世 中興 大圓武志大和尚が遷化されて、早や四年の星霜を経て、今更ながら不世出の仏教者であったという思いをつのらせております。

不肖 私が老師の膝元において得度、その後二年の大本山永平寺安居を経て、北米ロサンゼルス禅センター、次いでタイ国ワット・パクナムでの安居と貴重な宗教体験をさせて頂きましたことは、私にとつての本質的な宗教的回心の契機となったものであり、筆舌に尽し難い御法愛と感慨を新たに致しております。

小生 現在、師父の補佐役として、山形市の一寺院にあって法務に従事しておりますが、大

圓武志老師の「人の為に尽せ」の箴言を体して今後とも精進して参りたいと念じております。

善光寺様において、本年度から中断していた留学僧育英会の事業を構想も新たに、新住職博士師の下に展開されるとの報に接し、大圓武志老師もさぞ御慶びのことと感慨無量なるものがあります。

善光寺様の益々の御隆昌と留学僧育英会の発展を衷心より祈念申し上げる次第でございます。

第十三回留学生 山口菜生子様

故阿部慈園先生のご紹介で、黒田武志先生にケンブリッジ大学留学中にお世話になりました、山口菜生子でございます。

この度は、善光寺留学僧育英会の再開、おめでとうございます。心よりお慶び申し上げます。

私は、大学卒業後は、翻訳の仕事などとして

いたのですが、学者の夫の手伝いをしているうちに自分の勉強がおろそかになり、今日に至ります。善光寺様には業績を報告できず、申し訳ない気持ちです。また外国に暮らすことが多いこともあり、なかなかご挨拶にも伺えず、心苦しく思っております。

黒田先生に暖かいご支援をいただいたことは、両親とともに度々思い出し、感謝しております。育英会と皆様のご多幸をお祈りいたします。

第二十回留学生 小野卓也様

善光寺留学僧育英会の奨学金により、インドに二年間留学させて頂きました。留学中はパンドイットの先生に師事し、難解なサンスクリット文献を読みました。帰国後は、その成果をまとめて博士論文を準備しているとありますが、古い千年以上前の思想が現在においてどのよう

な意義をもつのか、さまざまな角度から検討しているところでございます。このような機会を与えて下さった黒田武志御老師と善光寺の皆様には、深い感謝をささげ、またその御遺志を尊び自分のできることを行つて参りたいと存じます。

徳林秀陽様

節分の時節春が近づいています

留学生が多く貴奨学金のお世話になりました。
た。

さてホアントロンソー師、マニックバジュラ
チャールヤ師は、博士論文を提出し学位を得て
帰国されました。大変お世話になりました。





■ 特集

六月十六～十七日

山形・善寶寺参拝旅行

黒田博志住職以下総勢四十一人の善光寺旅行会一行は、六月十六日から一泊二日の日程で「善寶寺参拝の旅」を行いました。龍神守護の霊場として知られ、全国に多くの信者を持つ大祈禱道場であり修行道場の善寶寺から、「閑さや巖にしみ入る蟬の声」の芭蕉句碑が建つ天台宗の古刹、山寺立石寺を回っての旅でした。



齊藤老師より親しくご法話をいただきました





善寶寺住職・齊藤信義老師（大本山總持寺副貫首）に大般若祈禱をお勤めいただく



↑ 東北屈指の名刹・
善寶寺の大伽藍

龍王殿の絵天井→



← あの噂の人面魚



出羽三山神社（上）や山居倉庫（下）などの山形の観光名所を見学



齊藤老師を囲み、湯野浜温泉「いさごや」で会食





天童市・山寺「立石寺」を参拝



石段を一步ずつ



食べごろの名物・さくらんぼを堪能

古刹 善寶寺参詣と

山形の旅

善光寺旅行会 団長 熊谷 豊太郎

六月十六日、早朝黒田住職以下男性二十二名、先代住職倫子夫人他女性二十一名計四十三名。羽田空港より、一路庄内空港へ。庄内平野は、全天、青の世界。早速保春寺大八木ご老師の温かい出迎えを受け、約二十分のち鶴岡市内へと。いかにも空港敷地内に位置するような龍澤山善寶寺へと導かれる。寺は延慶二年（一一三〇九）、大本山總持寺の二祖である峨山禪師が開祖として開く。供養と祈祷の寺。また求道と修行を實踐する専門僧堂として過去幾多の名僧、高僧を輩出。現在十七名の雲水が修行に明け暮れる。ここ龍王殿には龍神様がお祀りされ、ご祈祷、

祈願のご利益あらたかを希う。漁業、海運関係者の信仰が篤い。西の琴平金比羅さま、北の善寶寺龍神さまといわれる所以です。域内には龍神さまが身を潜めたといわれる貝喰の池。かつて人面魚の棲息で話題沸騰。全国にその名を馳せる。時折人面魚が愛嬌をふりまき、みなさん悦び拍手喝采。

彼の藤沢周平氏の小説「龍を見た男」にも登場。また「善寶寺物語」と謂う作品もあるようで、近々完成する藤沢周平記念館でも紹介されるとのことでした。一行は数百年の杉巨木を背に、高さ三十八を超える「魚類一切供養塔」と称する五重塔を仰ぎながら水屋で身心を清め、いざ山門をくぐる。さらに九十六の石段。登り詰めると、そこにはおいかぶさるように本堂感応殿が広がる。静寂に包まれ引き寄せられるように本堂へ導かれ、やがて一行は心静かに順々と着座する。

正面にご本尊を祀る莊嚴華麗な祭壇のもと、左右に僧衣鮮やかな大勢の僧侶。檀信徒代表の請い願う諸々、そのご祈祷を肅々と、斉藤信義ご住職のご導師によって、厳修賜ることができました。のち奥の院神靈殿に参拝。恙無く所定の供養祈祷会を終了することができました。

間もなく信徒会館に案内され、見事な座布団が並ぶ大広間。斉藤山主さまのもとお茶の接待をいただく。茶席でのご法話。『慈悲の坐禅を生きる』という猥下のご本より。艱難辛苦のご修行時代、寒行托鉢の最中、おばあさんに手にぎられ、その両手で包んでさすって温めてくれた、あの手のぬくもり。これこそ感応道交。師の今日、原点となっている「慈悲心の尊さ」について、真の宗教とは經典ではなく、仏行の実践だと熱くお話くだされまして、ありがたいことでした。

斉藤信義猥下は善寶寺四十一代目のご住職を

兼ね大本山總持寺副貫首に在り、また仏教の国際交流に貢献する事業として成寿山善光寺留学僧育英会の名誉顧問として当初より関わっていただいております。この度、私共のご訪詣には、自ら指揮。全山挙げての歓迎を賜わった次第です。また先に空港にお出迎えいただいた大八木ご老師は大圓武志大和尚と駒沢大学同期生であり、知己の間柄。善光寺にはよくお運びいただき、お世話になっていきます。一行を是非にもと保春寺にお招きいただきましたが、時間の都合で参詣できず、保春寺門前通過中のバスの中よりお詣りさせて頂き、合掌低頭。ご住職は門前にて大きく手を振りお応えくださいました。ご老師は善寶寺の寺務の役割も兼ね、ご多忙のなか終始温かいおもてなしやお心遣いを賜わり、厚く厚く御礼の次第です。一行は駆け歩き、出羽三山の一つ、羽黒山神宮へとすすむ。日本最古といわれる五重の塔をのぞみながら、三神合

祀殿に拝登。ここ羽黒山は古来、全山古修験場として夙に有名です。

さらに酒田市へとバスは向かう。北国と西国間の貿易、いわゆる北前船で日本一の豪商といわれた本間様の旧本邸を訪ねる。「本間様にはなれないけれど、せめてなりたや殿様に」。随所にその面影を観ることができました。そのすぐそばに「おしん」で有名な山居倉庫。船着き場や米倉庫を散策しながら、遠くを偲んでおりました。第一日目の旅程もこれにて終了。

やがてバスは陽の傾くころ、湯野浜温泉へと向かう。場は日本海を一望できる最景勝地。露天風呂で疲れと汗と埃を流しながら極楽極楽の気分。身心共にすつきりと致しました。

宴席に突然の吉報。狛下様をご臨席くださるという。三筋の川並びをコの字型へと変更。異例ともいわれるご臨席のなか開宴。一行の喜びも最高潮。なんともありがたいことです。狛下

は実に穏やか。寺院で観る龍の蟠る凜々たる気魄は、すっかり消えて終始和やかなご容姿。御年九十一歳。「私はネエ、宴会はみなさんが楽しんでるから好きなんですヨ」とおっしゃる。「私がここに坐しているのは、大圓和尚の功德なんですよ」といわれ、ここでもまた改めて、大圓さまの庇護のもとに在る檀信徒一行、そのお蔭に唯々感謝合掌でございました。

翌十七日は通称山寺、宝珠山立石寺に向う。参詣者は千十五段の石段を登り、奥の院へ。また別組はこの山寺で吟じたという「閑けさや巖にしみ入る蟬の声」の名句、芭蕉会館を訪ね、昼ごろ追いつ追いつ山荘へと集結。たのしく山菜料理をいただく。席々懐かしい陣中見舞いのお方。山形市・高松寺住職、福田孝雄ご老師とご子息、智昭さん。善光寺とは、とてもご縁深きお方。皆さんも再会をよろこびながら、短い時間の忙しい懇談でした。やがていよいよ最終コ

ース。みなさん楽しみにしていた「さくらんぼの喰い放題」。いまが旬。鈴なりに熟れた大粒をむさぼり、ほっぺたまで赤く熟し顔。流石天下の「佐藤錦」でした。充たされた善男善女、満足して山形空港へと急ぐ。定刻羽田空港へ。想い出を胸に最高のフライトでした。二日間すべて順調。なにひとつ障りなく護られての旅でした。殊に宗派の頂点、斉藤猥下よりのお持成し、大八木ご老師、福田ご老師方の篤いご縁は、これすべて大圓武志大和尚のお計らいと思召し、ほんとうにありがとうございます。またこのたびは大圓和尚令夫人もご参加。蔭に陽にお心配りを下さいました。

また旅行社の小林課長さんの細かい気配りにも感謝です。いまこうしてペンを執りながらも想い出尽きず、内容の濃い充実感に充ちたこの度の旅行でした。ありがとうございます。



山形旅行 雑詠

善光寺護持会会長 国廣 敏郎

庄内空港に下り立って、早立ちの眠気がいっぺんに覚めた。北に残雪輝く鳥海山、遙か南方に羽黒山、月山、湯殿山の出羽三山。磐梯朝日国立公園である。

鳥海の雪溪まぶし最上川

ありがたや三山神社の雲の峰

日本海の夕日が拝めるといふ。宴会を中座して海岸に駆けつけた。

夏の雲映える落暉の日本海

芭蕉句碑のある立石寺の小広場から見上げる千百段余の参道もほんの途中までしか見えな
い。あとは万緑と岸壁の中に消えている。

青嵐ひたすら登る磐の道

最後は天童でさくらんぼ狩りを楽しむ。手のとどかぬ梢の先の方に宝石のようなさくらんぼが
びっしり。

仰ぎ見る夢一杯のさくらんぼ

善寶寺参拝の旅に

参加させて頂いて

稗田 妙

三月も終わりのある日、横浜市在住の弟から

「善寶寺参拝の旅」の知らせが飛び込んできました。待つてましたとばかりに是非参加の意を伝え、即、神戸の姉にも連絡し、その日の来るのを待つていました。

送つていただいた行程表にワクワクしながら機上の人となり、晴れわたった青空のもと、庄内空港に着き、鶴岡市龍澤山善寶寺にお参りとなりました。

立派なお寺、全山伽藍をなすというか壮大さに驚きの目を輝かせ、ご案内の言葉に耳をそばだて、ありがたくお参りさせていただきました。

荘厳な大法要・ご祈祷にひたすら身も心も洗われる感動にひたり、仏のありがたさに全身を包みこんでいただいた思いでありました。

斉藤副貫首様のご法話、さらに宴席にまでお出ましになられ親しく接して下さったお姿に、感謝の気持ちいっぱいです。

今はこの気持を忘れずこれからの人生に副貫

首様の著書、尊いご本を読ませて頂き、生まれてよかった、生きていてよかったという思いをさらに大きく、意義ある日々を過したいと心に誓つてお礼の旅とさせていただきます。

ありがとうございます！

合掌

オーラとご利益を感じた

山形の旅

堀 貴子

今流行の「オーラ」「靈感」、幸か不幸か、私はいままで見たことも感じたこともない。しかし今回山形の旅は、何度もこのオーラを感じ、鳥肌の立つ経験をしたのです。これが神仏の発する霊妙なのか、私の肌が感応したことを覚えます。

曹洞宗大本山總持寺副貫首齊藤老師様の行往坐臥あらされる古刹善寶寺。凜として、静けさの中に力強さを感じる、立派で上品で荘嚴な寺でした。

齊藤老師様は、私達の待つ本堂へ風のように飄として現れ、ゆっくりともの静かな動きの中に、九十一歳とは思えないパワーを發散。鈍感な私でも鳥肌が立つオーラを感じるのです。私はそのお姿を拝見し、限りなく近くへと、坐する場所を何度もずらしていたのです。

読経の後、お茶席へと案内されました。お茶を淹れて下さる雲水の方々、その立ち居振舞い、見事です。碗を持つ手、指の先、布巾の運びしぐさは、ゆったりと流れるようにどこにも無駄がありません。実に美しい。私はただうっとりとお見惚れてしまいました。

やがて寺を後に、落陽日本一と名高い湯野浜温泉「いさごや」へ。わあゝ温泉だあゝ。うれ

しい。窓から飛び込む日本海。温泉に浸りながら太陽を拝む。天空より海へと沈みゆく夕陽。こんな贅沢な時間を過ごせていいものか、ただただ感謝し手を合わす。

さあ宴会。美味しい食事に少しばかりのアルコール。いい気分です。

父がマイクを手にカラオケ三昧。はずかしいやら心配で見えていられないのです。今回も父と一緒に参加させていただきました。皆様から親孝行娘とホメられる。これは私の役得。母亡きあと、寂しい父が気になります。うれしい勘違いをしていたら、有難うございます。

楽しい時間は過ぎるのが早い、齊藤老師様程なくご退席のとき、格段そのままに見送りなきようにとのご配慮。私はその後姿を遠くから、動くオーラに手を合わせ、全身が吸い込まれそうで、涙が出てしまいました。

二日目は蟬しぐれのなか山寺「立石寺」へ。

石段千十五段を奥の院まで。私は若い方なので
余裕があると思ったのが間違いの元。辺りを眺
める余裕などありません。私より年配の方々
も追い越され、スタートの時、後ろを歩いて
たはずの父にも追い越される。父の元氣さに安
心する一方、自分の衰えを痛感した次第です。

三十分ほどで、奥の院へ到着。達成感で一杯
でした。仏前にお線香をたむけ、母の浄土と父
の健康を願ひ、そして少しばかり自分の都合の
いいお願い事もしてしまいました。きつとご利
益はあるでしょう。帰りは胸をはっておしゃべ
りをしながら楽しく、アツという間でした。

さらにさくらんぼの食べ放題という果樹園
へ。甘く大きいさくらんぼを一杯頬張ることが
できました。帰りは高級佐藤錦を両手にズッシ
リ買い求め、機内へ。楽しかった刻々、とても
密度の濃い経験をさせていただきました。

次回は父のカラオケも上達、私はさらに仏教



の尊さに埋没してゆくことと思っっています。有難うございました。

佛縁を想う

横浜やすらぎの郷霊園所長 伏見 邦弘

佛縁の旅に参加させて戴き、三度目となりました。

私と大圓武志方丈とは幼稚園からの同窓。六十有年の間柄です。

成寿山善光寺との関わりは、武志方丈と倫子さんとの結婚式に始まります。四十年余り前でしょうか。

しかし、或る期間勤めの関係で、佛縁など凡そ途切れてしまいました。

そんな或る日、突然の電話。「お前、生きるか。よかった。実は霊園を建設している。明

日、関連の開発会社と石材組合との会議があるのだが、出席願えないか。できれば霊園の応援を頼みたい」と。私が第二の人生を踏み出して間もないころのことです。すべて一方的。

自前の霊園を持つことは、それこそ一大事。方丈には否といえない知己。言われるままに承知。無能、微力の者ですが、お役に立てるのであればと引き受け、第二の人生が始まりました。無我夢中で手探りの日々。早いものです。あれから十一年、やすらぎの郷と共にあります。

これも佛縁。開園時の若木も今は鬱蒼と茂り、草花も四季折々に霊園を彩り、参拝者の方々に癒しと安らぎを与えております。

順々と第二次、第三次拡張工事も済み、方丈の理念に基づくやすらぎの郷は、落ち着きのある霊園に成長して参りました。

この度、山形への旅では是非にもお逢いしたい方がおいででした。善寶寺の重鎮、保春寺住

職の大八木老師。庄内空港に降り立つと、早速お出迎え。多忙な方なのに、早朝より何ともありがたいやら、びっくりするやら……。檀信徒一同、大感激でした。

善寶寺はまさしく東北の最古刹。大本山總持寺副貫首でもあります齊藤信義住職自ら導師を戴き、法要を賜りました。誠にありがたいことです。

副貫首様は善光寺育英会の名誉顧問であり「育英会は世界を見据えた人材育成の会として比類なきものである。私としてもさらに支援していきたい」とのご法話をいただきました。

副貫首様自らがご丁重な一服のお茶をいただきながら、感動感謝のうちに退山となりました。

夜、檀信徒の宴席にも、お忙しい中、ご高齢を押しのご臨席。武志方丈とのご縁とはいえ、誠に有難く、めったに得られない幸運。鳥肌が立つ感激をいただいたのは私ばかりではなかつ



た。

重々にも、大八木老師の二日間に互るお心配りには唯々感激し、頭の下がる思いでした。

流石、大圓方丈が心の友として久しかったことに納得させられ、私もまた友人の一人として羨ましささえ感じました。

大八木老師の山中待ち伏せでのお見送りに、車中合掌、涙の出る思い。やがて山寺立石寺へ。昼食会では思いがけなく尊いお方が。今は山形市・高松寺住職、かつては善光寺にいらした福田老師と、ご子息・智昭師。元気なお姿を拝し、大拍手と合掌。旅団を労い、お土産まで頂戴し、感謝感謝でした。

一昨年、大乘寺拝登の旅、昨年の本寺光眞寺参拝の旅、そして山形路、この間出逢った皆様方、大圓方丈との知友とは申せ、訪ねる檀信徒に心尽くしのおもてなしをいただくなど、武志方丈の佛縁と絆の尊さをこの上なく痛感した旅

でもありました。

旅が続く限り私は参加し、限りある人生を尚深く佛縁によって歩いていきたいと思っています。

拝





〈連載〉

『普勸坐禅儀』 に学ぶ その四

駒沢女子大学教授 安藤 嘉則

〈本文 書き下し文〉

所以ゆゑに須すべらく言ことを尋たずね語ことばを遂おうの解げ行ぎょうを休やすすべし。

〈現代語訳〉

だから（坐禅するときには）言葉の意味を理解しようとすることはやめなさい。

この『普勸坐禅儀』は最初に「道本円通」（真実の道は本来あまねくゆき亘っている）という

ことから文章が始められていました。

このことについて思い出されるのは道元禅師の次のような歌です。

峯の色 溪の響きも みなながら

我が釈迦牟尼の 声と姿と

（山々の姿も、谷川をせせらぎの音も、すべてみな 私がお慕いしている 釈迦牟尼仏の声であり、姿なのです）

また、『正法眼蔵』には「山水経」という巻があり、その冒頭に「而今の山水は、古仏の道現成なり。」つまり今日の前に見える山や水も諸仏の真実の道が現れ出たものであると説かれています。

二十数年も前のことでしたが、荒井由美さんがディスクジョッキーをつとめていた深夜のラジオ番組を聴いていると、荒井さんが自分の歌について語っていました。それはあるとき北鎌倉のお寺に行ったときのこと、あるお坊さんから、「あなたの『やさしさに包まれたなら』という曲は『般若心経』の心をよく説いている」といわれたということです。実は学生時代この曲を聴いて私もまったく同じような感想を持っていたので、やはり同じことを思う人がいるんだなと思ったことをはつきりと覚えています。それは次のような歌詞でした。その一部を挙げてみましょう。

心の奥に　しまい忘れた　大切な箱
開くときは今

雨上がりの庭で　くちなしの香りの
やさしさに包まれたなら

きつと　目に写る全てのこと

メッセージ

歌詞の冒頭に「小さい頃には神様がいて」とあるので仏教とは関係ないといわれる向きもあるでしょうが、本来もっているものを解き放ち、すべてのものから発するメッセージを受け止める心のアンテナをもったとき、改めて見えてくるもの、聞こえてくるものを唱っています。

『般若心経』ではすべてのものが空（実体がない）を説きます。だから昨日の自分はどこにもありませんし、明日の自分はきつとあるのだらうけれど今はありません。過去の自分と今の自分どちらが本当の自分なんだろうか、実は

三十の頃のあのときの自分が本当の自分なの
だといってみても仕方ありません。今の命をいた
だいた今の私があるだけ。そしてそれを精一杯
生きるしかないのです。空であるからこそ、今
生きている自分の命のかけがえのなさ、そして、
あらゆるものの存在の輝きが見えてくるのでは
ないでしょうか。そうしたまなざしで見ると、
すべてのものから発せられるメッセージを受け
止めるアンテナが立つのです。ですから『普勸
坐禅儀』冒頭の「道本円通」の句は、先ほどの
「峯の色」の歌や「山水経」でいう「あらゆる
ものが真実を説いているのだ」と通じるところ
があると思うのです。

しかしながら実際には私たちにはなにかにつ
け「こちらよりあつちがよい」と比べる心や分
別心が働いてしまうため、ありのままの真実を
受け止めるアンテナが立ちません。明鏡止水の
ような心であれば、ものごとをありのままに映

し出しますが、実際には自分の分別の眼で、す
なわち色眼鏡で見てしまい、見れども見えずと
いうことなのです。それが私たちの現実の姿で
あるといえましょう。だからこそ、釈尊や達磨
大師をはじめ実に多くの祖師たちが修行に励ん
できたのです。まして我々はいっそう努力して
心の扉を解放していかなくてはならないので
す。以上のように、我々がなぜ坐禅修行をしな
ければならないのかということが示されていた
のです。

さて、こうした文脈をふまえつつ、この段か
らは実際に坐禅をする場合の心の有り様につい
て述べられています。冒頭に掲げた「言を尋ね
語を逐うの解行を休すべし」というのは、坐禅
ではあれこれ言葉の意味を通じて認識し理解す
ることをひとまずやめてしまいなさいというこ
とです。我々はふだん当たり前のように言葉に
用いて人とのコミュニケーションをはかり、ま

たものごとを理解しています。もし言葉がなかったら、どうでしょうか。もちろん社会生活は成り立ちません。

たとえば野山の草木をみると、けなげに咲いている小さな花の名前を知っている人と知らない人とはどうちがうでしょうか。知らない人にとっては単なる雑草にしか見えないかもしれませんが、その草花の区別を知っている人にとつてそれは意味ある花となります。言葉を知っていることは、ただ言語的な問題ではなく、その人の心豊かな生活を開く道具であるともいえるでしょう。そうしたところから人々は歌や詩、そして文学を生み出してきたのです。

しかし言葉はあるときには人を傷つけ苦しめますし、あるときはその同じ言葉が人を励まします。たとえば「彼は能力がない。ダメだ。」という上司の言葉が、人を絶望につき落とす場合もありますし、あの上司の苦言が私をいい方

に成長させたということもあるでしょう。すなわち同じ否定的評価に発憤する人もあれば、心の軸が折れたようになる人もいます。しかしながら、そもそもその言葉自身もはたして正確なのでしょうか？ある人が大嫌いな部下をその色眼鏡で評価するとき、なにを話しても悪く評価し、気に入った仲間であれば、同じ失敗をしても気にもとめないということとはよくあることです。つまり言葉は発する人にとつても受け止める人にとつてもけつして絶対的ではなく、あくまで相対的なものなのです。

禅宗のスローガンとして「不立文字、教外別伝」とか「以心伝心」という言葉があります。このうち不立文字は「ふりゆうもんじ」といっています。そのまま読むと「文字を立てない」というように理解されますが、これは文字そのものを否定しているわけではありません。また「教外別伝」とは（教はここでは経典や教理を意味

します)、眞実は經典や教理そのものではなく、經典の外に伝わるものであるということなのです。

これについて禪門では有名な「指月の譬え」としてよく説明されます。つまり經典は月という眞実を指し示す指に譬え、指そのものが眞実ではないということをしています。しかし私たちがとつてお経はやはりありがたいものであつて眞実そのものではないかと思う人も多いと思います。

確かに仏教にはさまざまなお経や教えがあり、それらは大切な仏の教え、眞実を説いてやみませんが、もし經典そのものが眞実であるとする、ややもするとこのお経だけが眞実であり、それ以外の經典や教えは違ふのだという考えになり、お経のちがいで争うこともあるわけです。実際に中国や日本において仏教を受用する過程の中でそのようなことがあります。しかしこちらから月を指している指だけが正しく

て、向こう側から指している指はまちがつていふということではないはず。あくまで天に輝く月は一つであり、大切なことは指の方を見てその優劣を争うのではなく、指された月を見つめること、眞実そのものを受け止めていくことが大切なのです。

〈本文 書き下し文〉

須らく回光返照の退歩を学すべし。自然にして、本来の面目現前せん。

〈現代語訳〉

自分を振り返つて自身を見つめ内省することをしなさい。そうすると身も心に対する捉われが自ずから抜け落ちて、本来の自己の姿が現れてくるのです。

「回光返照」というのは、光輝く太陽が西に

沈んでも空が反射して明るく光ることが元々の意味ですが、ここでは外に向かつてみる心の働きを自己の内側に転じて内省することを意味しています。また「退歩」とは進歩に対する退歩ではなく、根本に戻ること、本来のところに立ち返ることを意味します。要するに「回光返照の退歩」というのは自己をみつめなおすことです。坐禅とは言葉を通じて仏教を概念として理解するのではなく、向きあうべきは自分の心と身体なのです。それは自己との対話であり、自らの心身との真剣勝負であるといえましよう。

このように自己をみつめなおすことによつてさまざまならわれも自然と抜け落ちてしまいい、そこに本当の自己、真実の姿を見出しにくのです。ここで「身心自然に脱落し」というのは、いわゆる道元禅師の教えでよく知られている「身心脱落」のことです。この身心脱落と

いうことについて、道元禅師は師の如浄禅師から次のような教えを受けたことが『宝慶記』に記されています。

参禅は身心脱落なり。祇管しかんに打坐たざして始めて得べし。焼香・礼拝・念仏・修懺しゆまゐ・看経かんきやうをもちいず。

(参禅は身心脱落であつて、ただひたすらに坐禅して始めて得るべきである。焼香・礼拝・念仏・修懺・看経など、他の行いによらないのである。)

在宋中の道元禅師について伝記は次のように伝えていきます。ある早朝の坐禅のとき、如浄禅師は居眠りをしている僧に打ち、「参禅は須すべらく身心脱落なるべし、只管に打睡して什麼を為すに堪えんや」(参禅は身心脱落でなければならぬ。それを、ただ居眠りをしておつて何事

かー」と叱咤したのです。その声が響くなり道元禪師ははっとします。そして坐禪を終えると如浄禪師を訪れ、うやうやしく焼香礼拝しました。如浄禪師は「どうしたのか（作麼生^{そもざん}）」と問うと、道元禪師は「身心脱落しました」と答えます。すると如浄禪師は「身心脱落・脱落身心」と答え、その道元禪師の身心脱落を認めたといわれます。これは道元禪師にとって大きな体験でありました。

こうした道元禪師の身心脱落の話を読むと、まさに悟りの体験が述べられているといえるのですが、これは一時的な神秘的な心理状態ではありません。坐に徹する中で心身のとらわれから解放されたあり方といえるのですが、実はこの身心脱落については宗学という学問の分野ではそのとらえ方にいろいろな議論が展開されています。しかし今はそうしたところには立ち入ることはいたしません。大切なことはまず坐っ

てみるということ。坐禪をするには僧堂のようなどころで一坐懸命研鑽するのが最もよいでしょうが、私たちは必ずしもそういう場所に恵まれているわけではありません。しかしそのような気持ちに目ざめるならば、意外と身近に機会はあるものです。

善光寺をはじめとするお寺の坐禪会に参加なさるのもよいでしょう。また一日の内のわずかな時間でもいいですから、自宅で背筋をきちんと伸ばして呼吸を整え、どっしりと坐ってみてはいかがでしょうか。そのためのやり方を次回以降に紹介いたします。

平成二十一年六月二十六日
善光寺初盆供養法会にて

死者と生者——施食会にちなんで——

駒澤大学名誉教授 佐々木 宏 幹

一、はじめに——「あの世」の発見

あの世があるのか、それともないのかは、今のところ科学の立場からは結論が出せない。ないかもしれないけれども、確実にあるかも分からない。これが科学評論家の、今の日本を代表するといわれている人の結論です。ところが宗教という文化、キリスト教、イスラム教、大乘仏教では、あの世はあるという、そういう建前に立ちます。

あの世がある。見えるこの世に対して見えな

い世界がある。さらに仏教では、見えないあの世が見えるこの世を支えてくれていると説く。これを「ご縁」と申します。難しく言うと、仏教では「縁起」というのですが、「ご縁がある」の「縁」に「起こる」と書きます。その縁起というのは、ご縁によって自分が起こる、生じるとか、今あるとか、だんだん成長していくという事実を意味します。

この縁起はお釈迦様が悟った内容なのです。どういうことか。お経に「此れあれば彼あり。

此れあるによって彼生ず。此れなきによって彼なし。彼滅するによって此れ滅す」というのがあります。今二つ、「此れ」と「彼」に分けました。それがあの世とこの世とか、見える世界と見えない世界、こうなります。

霊長類の猿は、いくら教えてもあの世は発見できない。アメリカの学者が一生懸命教え込んで、亡き子供、あるいは自分の妻だった亡きメスの猿にオスがどのように対応するか、付いていながら教えたけれど、ついにダメ。

そこで結論は、猿類が人間になった最初の存在である旧人類、あのネアンデルタールは七万年前か十万年前にすでにお甲いをやっておったということ。今ゴタゴタ戦争しておりますイラクのシャニダールというところの洞窟から発見されたのです。一九五〇年代ですから、あまりまだ経っていない。これが考古学における二十世紀最大の発見だったとされます。

なぜそんなに騒いだかというと、宗教の起源、起りは何かということが明らかにしたからです。生あれば死ぬ。仏教ではどうせ死ぬのだから生あるうちに真面目に一步でも二歩でも、お釈迦様に近づくような努力をしましょうということになる。皆さんも仏教徒で仏教に縁をいただいております。仏教では「成る」ということはお釈迦様に近づいていくことです。お釈迦



様は一生懸命修行して「成仏」された。この「成仏」とは何かというところ、「成道」したこと。「成道会」をこのお寺でもすると思いますが、キリスト教やイスラム教にはこういう観念はないんですよ。それで仏教は「成る」宗教なのです。

今日のお話の肝心なところは、皆さんの中には、愛する人を失って心中悲しんでいらつしやる人がおられるはずですが、それは家族の中とか、親しい人と私の間にある日、人の死という、大きな穴が開いちゃった。その穴をどうして埋めるかということで、社会によってつくり出されてきたのが葬式とか弔いであるということですよ。

弔いというのは何であろうか。「葬」という字を見てみますと、「死」の上下に草と草が二つある。今は化学繊維のふかふかしたものがありませんが、私が小さいころは藁布団というのを田舎では使っていました。藁を叩いて柔らか

くしたものを敷布団の中に入れてふつくらせさせたものです。それを死者の体の下に敷いて、上から掛け布団をかけてやる。ねんごろに死者を葬る、これが「葬る」の意味です。この世で亡くなつて死者になつても、なお死者は生きている、死者は死者として生きていくというイメージがなければこういうことをするわけがない。それが人類と他の動物、何千種という動物との違いであります。

よく「あいつは人間でないよ」とか「人間性がない」という言い方がなされますが、その基本には、死者というものを「死んだらチャラだ」などと言って、死者をモノとして扱うという気持ちをもつ人、こういう人が今の日本にはなきにしもあらずですが、これは大変なことだと私は考えております。そういう思いが強くなればなるほど、「お母さん、人を殺してなぜ悪いの」とか「誰でもよかった」「むしゃくしゃしたか

ら殺した」、秋葉原事件がまさにそうでしたが、そういう人がなぜ増えるんだろうか。これはご先祖を、あるいは死者を慰める、死者にあの世で安心していただくという文化が弱くなったからではないか。死者にはお釈迦様の下に早く近づいてほしいという願い、そしてその願いに応じて死者は「成仏」するのです。本当は皆さんは生きている間にお寺のお弟子さんになって成仏を図るべきですが、一般の人は仕事を持っておって、なかなか生前にお寺との密な縁を持つということとは難しい。だから亡くなった後にお釈迦様のような大平安、あるいは大寂定と申しませんが、最も心が和やいだ静かな状態、つまりお釈迦様のような人に成ってほしいと願って行くのが「葬」であり「供養」なのです。

そういうことで葬ということが始まったのですが、私のやっている文化論から見ると、よく人間は文化文明を持っているといいますが、文

化を持ったということは人類が「あの世」を発見したということです。あの世を発見するためには、よほどの知恵が必要なのです。

二、「死者」のイメージ

大切なのは、現代の日本人は死者をどのようにイメージしているかという問題なのです。皆さんは亡き人をめぐって今日も善光寺さんに集まりました。心の中で「あの人」というのをどうイメージしていますか？ いろいろだろうと思います。私はそれを三つくらいに分けてみました。

一番目は霊とか魂だとか言われているものでして、肉体に宿るモノ。私が今マイクを持って皆さんの前でおしゃべりしているのは、私の中に「心」とも「霊」とも「命」とも「精神」とも、いろいろな漢字を当てますが、そうした存在が私の中にある。そういうものを「生命原理」と呼びます。命の一番元にあるもの、それが「霊」

と言われているものです。

この霊の問題を詳しくやるとまた一時間くらい経ってしまいますから、今日ははしりませんが、霊のもともとの意味は肉体に宿っていて、肉体を離れても存在すると考えられている精神的な実体だとされます。これが原初的霊魂観というものです。ところがここが問題。実体というのは大体動かなくて、成長が止まった固体をいうのです。実体はというと、動かないものという意味であります。これは仏教から見ると違うのです。仏教はこの世に動かないものはない。あらゆるものは絶えず動いているのだというところから始まるのです。「無常」という言葉をご存知でしょう。「常が無い」ということは、こうやってる間も私はどんどん歳を取り、皆さんもまだ若いとおっしゃれしておっても、この瞬間にも歳を取っているのです。これがさつき言ったお釈迦様の発見した「縁起」という



ことです。生まれたものは必ず老いる。これをごまかすな。よく見よ。やがて老衰して病になつて死んでいくものなんだと。そして死んだ後はあの世でまた死者として生まれなおす。そうすると生まれなおしたときに名前が必要なものだから、お坊さんから法名とか戒名とかをもらつていてしょう。あれはあの世に生まれなおしたときの名前なのです。

この世の「○○○○」はこの世で終わりだけれど、あの世に行く際にまた名前をいただく。こういうことなんです。ところであの世に行つた人は力を持つようになる。なぜか。それはお釈迦様から絶えずエネルギーをいただいで歩んでいるからです。目に見えない不思議な力かりに「霊」と呼ぶのです。

二番目は私の方です。目には見えないけれども自己の思い、心の中に生き続ける人格、これが「死者」です。目には見えない。皆さんも

お身内を亡くされてまだ一周忌の人もおられるでしょうから、そういう方はお墓におられるかもしれない。まだ遺骨を保つておられる方もあるかもしれないけど、それは遺骨であつていきなりニコニコしながら話しかけてくれる存在はそこにはいない。でも心の中に生き続ける人格、心の中に生き続ける見えない存在を、遺骨だとか写真だとか灰やお墓など、見える形の象徴を通して実感する。

シンボルとして、見えないものを見せるしかけが象徴です。だからお釈迦様の像を見たらお悟りを象徴しているから立派な相をしておられるのです。見えないものを見るようにするために、たとえば「日本」というものを目に見えるようにするために日の丸の旗を見たら、皆さん感涙に咽ぶこともあるでしょう。「勝つた勝つた、サッカーが」と、あれです。あれが象徴。日本国の象徴。だから目には見えないけれども

そういう象徴物を通して生きていくものと感応道交する。奥深い感情の中で、通じ合いがある。こちら側が感じれば、必ず向こう側が応じてくれる。そして交わる。これは七、八年前に出した私の『仏力』という本があつて、その中に死者をどうイメージするかということを書いてきたとがあります。

三番目はどういうことか。現代の日本人にとって、霊や魂は固定的実体ではない。さつきは霊や魂は精神的実体だと言いましたが、実体は変わらないのだけれども、死者は変わる、実体ではない。どういうことか。生きている皆様からの供養によつて、モノでも心でもお供えして、相手を和めることを供養といひます。「供える・養う」と書きますね。これは大事です。死者の供養、モノでも心でもそこにお供えして、相手を養つてあげる、慰めてあげる。そうすると向こうもこうしてはられないといひので、残つ

た悲しみを癒してください。これが感応道交です。そこで生者からの、生きている親族からの供養によつて死者は身を変じ、やがて仏身になる、変化する、そういうものであると解説することも可能です。

今三つ挙げましたが、皆さんのご親族、あるいはかけがえない人があの世に行つた際、この一、二、三のどれに当たるとお思ひでしょうか。今答を出す必要はありません。後でお家でゆっくり考えてみてください。たぶんこの三つは重なつていてと思います。どれか一つに丸を付けるといつても付けられない。これはなぜか。変化しているからです。どういう風に変化しているのかというと、あの人はこの世では迷惑ばかりかけたけれども、仏様の道に入ったから、あの人は仏様への道をひたすらに歩んでいるのだから高まつていく。その仏様の道のことを「涅槃の径」といふんです。



涅槃というのはお釈迦様がお悟りになってたどりに着いた境地のことです。もともとの意味は、大きく燃えている火がふつと消えたという状態。煩惱とかいろいろなもので、われわれはこの世にへばりついておりますね。地位だ名誉だ命だとへばりついておるのだが、それを超えてしまった境地をニルヴァーナと言います。インドの言葉です。それを「涅槃」と訳した。と

ころがお葬式するときお坊さんの言うことを聞いていると「涅槃の径に入らしむ」と、必ず詠みます。「涅槃の径」とはお釈迦様の境地にたどっていく道、「径」は「道」のことをいいます。そうするとお坊さんのお葬式とは「涅槃の径」に引導、引き導くこと、こういうことなんです。そこへ行った人はどうなるのかというと、「死者が仏様になる」ということです。

三、「成る」の宗教と「創る」の宗教

仏教は「成る宗教」。こう覚えていてください。今日のお土産は「仏教は『成る宗教』」、これです。どうしてかという、たとえばキリスト教やイスラム教は「創る宗教」です。「工作する」の「作る」ではなく、「創造」の「創る」です。「創る」というのは、材料が無い状態から、無から有を創るということ、大変な奇跡なんです。そういう宗教と、こちらではすでに人間が生きておった中に、お釈迦様という仏教を始め

た人が、小さな王国の王子様に生まれて、それでこんなに皆が苦しんでいる状態をどうやって解決するかというので、王様の地位を捨てて、奥さんも捨てて、子供も捨てて六年間修行して、「成った」のです。仏教とはそういう「成る」の宗教なのです。

ところがキリスト教やイスラム教は「創る」だから、「神はじめに天地を創りたまえり」と、聖書を読んだら最初に、神が最初に天地を創って人間を創ったと書いてあります。「成る」ではなく「創る」です。そこを今日、ちょっと覚えておいてください。

そして次に、仏教のお葬式は、死者を成仏の道に導き入れ、その後の手当てをする儀式である「追善供養」を行い、その歩みを助けるわけです。どうするのかというと、「成仏」というのは「仏に成る」ということでしょう。そうするとそこに「発心」、自分も仏様のところに行

きたいなあという心が発するわけです。キリスト教なら信仰を持つということですがね。発心をするのと修行が始まるんです。朝のお勤めで仏壇を拜むのもそうだし、曹洞宗ならば坐禅を組むのが大事な修行ですね。そうすると「菩提」というところへ行く。菩提とは「真理」ということですが、「お悟り」です。皆さんは「だれだれの菩提のために」と言うでしょうが、あの「菩提」はお釈迦様のお悟りを意味します。それで「涅槃」というのが、その菩提のさらに奥にある、お釈迦様の本当にお悟りになった、成仏の姿そのものを言うのです。そうすると亡き人も仏の国において、お坊さんによって発心させられ、修行して、菩提、涅槃となっていくということなのです。

これをもう少し説明すると、万物の生成は世界に内在する力によって可能になるということなんです。お魚はプランクトンを食べて、やが



て大きくなると人間に食べられる。野菜も最初は小さい種ですが、秋になると大きく実り、人間に食べられる。われわれはそういう食べることによって生かされている。それがさつき言いました、世界に潜んでいる力、「内在する力」ということなのです。これは少し難しく言うと、宇宙や世界を現にこのような姿にあらしめているような生態系、われわれは人間だけで地球に生きているわけではありませんよということ、動物から空気から水から、さまざまなものによって、私どもは「生きている」のではなく「生かされている」、生かしてもらっているのだという、こういう考え方ですね。そういう生態系、これがはたらきとして、われわれの命を育てておられます。それで発心、修行、菩提、涅槃と四つ書きましたが、それを植物にたとえますと、発芽、成長、増殖、枯死ということになり、見事に重なるのです。つまり植物の成熟と成仏は

重なるのです。成熟も「成る」。成仏も「成る」なんです。

四、「帰元」と「帰天」

それから最後に大事な点、「帰天と帰元」という話、これもぜひ、今日は善光寺さんのご法要に参加したのですから、そういうものなのかとご理解して、心のお土産にして戻ってもらいたい。「天に帰る」と書いて「帰天」、これ、どこの宗教が言っているか知ってますか？「あの方も帰天なさった」という風に使うんですが。では「昇天した」というのはどこの宗教ですか？キリスト教ですね。キリスト教では「逝去した」とは言いません。昇天、天に昇ったと言い、帰天、天に帰ったと言います。

天に帰るとはどういうことかというのと、彼らは十字を切って「天にましますわれらの神よ」と唱えるでしょう。神は天にいて、そこに死者も帰るわけです。でもこのごろのお葬式の弔辞

を聞いてみると、たまに「どうか天に帰ってゆっくりお休みください」と、仏教徒が言うんですね。あれは少しね。仏教徒が天に帰るのは困るわけですが、相当な知識人でもそういう風に乗べますね。だから仏教ではどうしたらいいかというのと、元に帰る、「帰元」と言えばいいんです。お寺さんで戒名を付ける場合、「新帰元何々居士」とか言うでしょう。「新たに元に戻られた人」を新帰元と言います。天に戻るのとは違う。

「元に戻る」と「天に戻る」は何が違うのかといえますと、キリスト教には宇宙万物を創った全知全能の神、何でもできるし、何でも知っているし、絶対人間はかなわない創造者がいるわけです。対して、仏教では死ぬことを帰元と言います。帰元の代わりに「逝去」とも言います。「行き去る」という意味です。この世を去ってあの世に逝く。その根っこには何があるか

というと、宇宙・世界の根っこは、宇宙・世界自体の働きによるということ、それを仏法といえます。仏の教えの中身です。そうすると仏法というのは、宇宙や大自然というものは、「此れによつて彼あり、彼によつて此れあり」という、原因があつて結果がある世界だとお釈迦様は見られた。生があれば必ず死がある。ひっくり返すと、死があることによつて生がある。これはちよつと、夜と昼ということと同じで、夜だけはないし、昼だけもない。言葉で言うと、昼は明るく、夜は暗くて闇。この対照でわれわれは毎日「まだ早いよ」「まだ暗いよ」とやっているわけです。

今生きているということは、裏に必ず死があるということなんです。そして死の裏にも生があります。仏教では「生死一如」、生と死は一つだということに風に言います。大変な哲学です。お釈迦様は「生老病死」ということを考えた。生

まれたものはだんだん老いて、病になつて死んでいく。これが発芽、成長、増殖、枯死という大自然の法則とびつたり重なる。だから仏法というのは因果、昼があれば夜もある、生まれてきたものは必ず死ぬということなんです。生まれてきたことが原因で、結果は死ぬということなんです。動植物も人間も、原因が生まれることにあれば、必ず結果として死ぬ。鶴は千年、亀は万年と言いますが、それはものたえで、鶴も亀も必ず死にます。生まれてきたから死ぬんです。こういう風に悟つたのがお釈迦様で、仏法が宇宙・世界の働きを説明したものだとするれば、因果の關係「縁起」として宇宙・世界はあるのです。仏教の究極、ぎりぎりのところは、生きている者も死んでいる者も、等しく仏法に導かれること、これにあります。

これから皆様が行います「施食会」という法要は、その重要な一コマです。亡き方々、数限

りない「死んでも生きている存在」である霊を招くのです。そしてこういう行いをするのはわれわれが人間だからです。お甲いの心がなくなると、「人間喪失」のようになってしまいうわけです。

今、六十そこそこの方で、ノイローゼとか物忘れとか、そういうものを抱え始めている人がいらっしやると思います。これは避けることはできません。そういう風なことを避けたいし、見たくないと思っても、生まれたからには必ずなる法則性なんです。

精神医の専門家である渡辺哲夫という先生が、『死と狂気 死者の発見』という本を書いておられます。「あの世とは何だろう」ということを、おじいさんから教わったと、そういう体験を書いているのです。

物心ついたばかりの哲夫少年に八十くらいのおじいさんが「哲夫、今日はお盆の十三日だか

ら、仏様を迎えて来い」といったと言っんです。「どうするの?」と言うと、「お墓に行って、その前で『お迎えに来ました』と言って提灯に火



を入れて、それを家に持って帰れ」と言われたと。十万億土を超えて、仏様はお墓から来るんですね。しかし哲夫少年の提灯の火はふっと消えてしまって、大失敗した。哲夫少年はわなわな震えた。十万億土を旅して来てくれたのに、ご先祖を追い返してしまったと。おじいさんに怒られると思つていきますと、おじいさんはあつさり「もう一回迎えに行つて来い」と。でも、もう一回迎えてくると、「よくやったな」と頭をなでられたと。これが渡辺哲夫さんの幼き日の思い出です。

そこで大人になって、お坊さんは十万億土の彼方の仏国土とか浄土とか言うけれど、それとともに浄土はお墓でもあるのだと。おじいさんの心の中では、十万億土とお墓は二重になっていたんだと。ここが大事です。死者はお墓にもいるし、位牌堂にもいるし、お仏壇にもいる。こういう風に重ねてしまう。キリスト教にはそ

れがなく、未亡人の奥さんがノイローゼにま
でなつたりします。

日本とアメリカとを比べますと、向こうの遺族はノイローゼになつたり大酒飲みになつたりすることが多いらしい。日本はじつと耐えて、そのうちに癒されていく。これはなんだろうと。拜むところは仏壇であり、お寺の位牌堂であり、お墓であり、はるか彼方のお浄土であり、別々でありながらそれが一つである世を形成している。それが日本人の未亡人を安心させているという結論なんです。

時間が参りました。今後、ご先祖様や亡き人を思うにつけ、今日のお話を参考にしてください。れば望外の幸せです。ありがとうございます。



平成二十一年五月二十八日

善光寺 身代り不動明王大祭にて

嘘から出たまこと 東郷 敏

ご紹介頂きました論語からのお話です。ここはお釈迦さまの場所です。この寺で論語とは何かというわけです。前回に引き続き、知ったかぶりの東郷。博志住職の命により、お取次ぎさせていただきます。ご生前大圓武志というお方はたいそうな勉強家で論語にも造詣が深く、善光寺の書庫には膨大な書籍や資料が山積。中に「四書五経」に関する本も一杯詰まっています。もつともここにいらっしやる倫子奥様が開基村

岡社長の所でお過ごしでしたので、この会社環境が論語の教えを社是として経営する企業でしたから、朝な夕なに論語を勉強なさっていました。

大圓和尚も仏教を限りなくわかり易くとお釈迦さまの教理を宗教と哲学、相合わせもって説き、一隅を照らしておいでだったように思います。

私はいまここに立っています。そして善光寺が



ここにある、倫子奥様がそこにいらっしやる。また博志住職が師父を継承しここにおられるという事実この諸々は実に冥加であり、その全て論語がとりもつ「縁起」だと申し上げても過ぎずありません。

前回、学習について、人は何故勉強するのか、何で学んで実行しなければならぬのか。その目的は何なのかという事をお話しました。せっ

かく人間に生まれたのだから、「ああ生まれてきてよかった。生きてきてよかったという思い」またもつといい事があつてもいいではないか。その為には享受するためのルールがありそれを「学習」してまず、自らの心身を整える必要がある。良くなる為の心が必要なんだと申し上げました。

今回は孔子が説いたその目的。学而編第一の第二番目についてすすめさせて頂きます。

「有子曰く、その人となりや孝弟にして上を犯し凌ぎ乱を作す者はいまだ有らざるなり 君子は本を務む。本立ちて道生ず。 孝弟はそれ仁を為すの本か」(学而第一—2)

孔子の高弟有子が「その人柄、即ち性質が、親に孝行であり目上の人に対して従順である人は目上の人を犯ししのぐことを好むものはいな

い。また反乱を起こしたり、世間をさわがす事を好む者もあらざるなり」とおよそ親孝行で徳ある人は物事の根本に力を尽くすものである。根本とは「孝弟」のことです。根本さえ確立すれば自然と人としての道が生じてくる孝弟こそ仁に至る必修条件である。と。

論語の中で「子」の付くお方は孔子と並び称され聖者だと云われています。仏教のお仏像にも色々あり、如来、菩薩、明王さまなど。しかし真の意味の仏像とは「如来」と呼ばれる仏像だと教えていただいた事があります。他の仏像は仏教の世界を人々に説くためにその役割が様々な形で表現され、そこにあらゆる形が存在する所以だと伺っています。実際私も相對するときどなたになにをと迷いながら手を合わせます。論語でも「子」のつくお方は最高の役割とお徳を備えた聖者だと承知しています。その有子が孔子の思想、実行の第一は父母に対する

「孝」。万人共通の本は親・祖先という事になります。

親に安心してもらいよろこんでもらい敬するということがその人の運命の岐れ道になつてくと教えているのです。

私の結婚式で仲人の社長「開基」からの祝辞。今でも焼き付いています。「東郷よ、君は今結婚する。結婚とは何かと言えば、夫は妻のご両親に、妻は夫のご両親に精一杯の親孝行とご安心を与えてこそ夫婦たる資格がある」と。

これを疎かにしたり忘れたら二人に未来はないぞ、結婚の意味はそういうことだと言われ、まるで、強迫・強要でした。

以来、いかなる結婚式に招かれましても必ず、お取次ぎさせて頂き若いお二人に肝心要だと敢えて述べて尽くしております。親に対する犠牲心こそは衆妙の門。なかなかできない事です。

言葉も意味もその大事さもわかりますよ。わかってもなかなかできない事です。理屈ではありません。素直にやれる人だけにわかるよろこびと幸いです。孝の道は尊くながいのです。

善光寺では二月四日。先に遷化されたご開山白純大和尚を偲び感謝の誠を捧げ尽くす「開山忌供養会」がとり行われています。祖先の日という事で、寺では最も大事な位置づけがなされております。これを住職も引き継いでいらっしゃる。大圓武志和尚遷化され、翌年二月『成寿』三十六号は師父の遺志に従い、「ご開山二十七回忌特別追悼号と致します。巻頭から全頁に亘って掲載された追善供養」。師父の理念を通していかにお尽くしであったかお手元にご本があればご覧くださいませ。

親の力と言うはすごいパワーを持っている。だから親を粗末にしたり、おろそかにしてはい

けないのですと教える。あるとき寺の掲示に「親、祖先を粗末にするものはやがて自分も粗末にされる」とありました。ドキッと致します。孔子が二番目に置かれた意義は、つまり、学習の目的は何かと言ったら本につくすためだぞ。

「本立ちて道生ず」だから本さえしつかりしていればその人はこの世の中に立ち自ずと道を開いていきますと仰せなのです。かく云う私、対する孝は全く足りておりません。已んぬる哉です。

曹洞經典の中にご承知の通り「父母恩重經」がございます。

父と母への思いが述べ尽くされています。「その大恩重きこと天のきわまりなきが如し」と。

存命中は我が一身を捧げつくし、父母亡き後はただひたすら追善供養をすべしと説かれてお

ります。

山形のある寺の住職さん。ご母堂さまが亡くなられた時、子となりや住職さん父母恩重経を繰り返し「続経」されたのです。やがて堂一杯大唱和へと導かれ私も周囲も人知れずして溢れる涙押さえられず故人を心から偲び哀悼の心捧げ尽くす事ができたのです。刹那わが父母に重なつて取り乱した事覚えています。実にわけがわかる「お経」僧界はこれを実現するが「信仰を篤くする」すべではなかるうかと思いつつ続いています。どうしてなのか状況同じくして機会に巡りあえないのです。

仏教は智慧の教え説得力のある「お経」と「法話」を願わずにはおれません。

神、仏、聖者は異口同音「父母を敬する」というを第一に挙げておいでです。

遠い遠い数千年前からです。ここの客殿、正面に大きな坐像、聖徳太子が安置されています。お気づきの方、ああ半分ばかり。日本に仏教を招来され普及の傍ら日本国憲法のはじまり、十七カ条を制定。「和を以つて貴しとなし、篤く三宝を敬え」と論し、さらにその理念第一に**わが慈父母を敬うべし**と熱い思いが日本書記の中に尽されています。この十七カ条、仏教と論語の思想を基調としてつくられたという。この条文一四〇〇年も前のことです。またキリストは旧約聖書出エジプト記の中にモーゼを介して示された神からの戒律その十戒の第一条「**汝の父と母を敬え**、されば汝神に護られいのち永らえん。これは民族的境を越え、全人類のためでもある」と啓示しています。親孝行は是か非かという次元ではない。昨今親らしさを子たちに見せる事は社会のしくみ或いは生活環境からむづかしくなっていることは否めません。「これ

でも孝を尽くすべきですか」と詰められると
にかと窮する場面が想像できます。「親、親足
らずとも子は子たれ」これも孔子の言葉です。

理由や理屈で通用しないのが孝の道。要は孝弟
を信じるか信じないかその人の智慧と心の問題
です。朝な夕な親祖先に向かい手を合わせるだ
けでいいのです。子たちに強制する必要はない
のです。やがて、子は嫌というほど親のマネを
するのが世の習い。

あるとき、宰我^{さいが}という弟子、「孝」を問います。
父母のためにする三年の喪はいかにも長すぎま
す。一年一周が天道の常。一年で十分と思いま
す。

孔子答えて、お前が平気であればよからう。
まことに「不憫」だ。一体子供は生まれて三年
の間是れ万人共通父母の懐に抱かれて育つ。そ
して三年しかるのちに初めて父母の懐を離れる
もの。その恩に報いるに因んで三年の喪が定め

られている。お前は実に情薄い人間だ ああな
にか云わんと嘆き論すところがあります。

また或るところ孔子が、「お父さんが生きて
いる間はその志を觀。父没するときはその行い
を觀る。三年父の道、改むるなきは孝というべ
し」というところがあります。

大圓和尚がご存命中のこと、博志雲水が永平
寺での修行報告書の中に「私は真似僧」ですと
ご信念を吐露した文章があります。

それを拝読し感動しました。何を真似するか
というと、父の後ろ姿を觀て父の真似をすると。
師父を敬して、敬して違わぬこのご姿勢。やつ
ぱりえらいなこのお方。大圓武志和尚のDNA
だと思っただけです。ここが論語の極意です。

お父さんの存命中はどういう心で、なさって
おられるんだろう、一生懸命に探り、父没する
ときはその行いを觀る。



生前父はどういう風にやっておられたかというところですよ。

父の志を観る機会がなくなってしまった。以来博志住職は、父がこういう風にやっていたから、私もこうしています。父がやっていたその通りの事をやらせていただいています。という。早や四年。

善光寺は、大圓武志和尚がお亡くなりしばらくの間衰退の一途だろうという人も少なくなかった。私もそう思いました。ところが、ご存知の通り、亡くなられてから、さらに、ご参詣も行事ごと全山に溢れかえり賑わっている。

昨今は大圓和尚があたかもそこに居ますが如くにもかも似ておいでだともっぱらの評判。いよいよ来年十一月大圓和尚七回忌追善供養に因み晋山式が同時進行。檀信徒挙げて新命方丈の到来を待っています。

住職はこの実相に鑑みてこれは私の力ではな

いんですよ、師父の余徳であり、お陰なんですという。私の力だと仰せでないところ父親ゆずりマコト美しき流れです。これが務本の学なんですネ。

石の上にも三年。という。三年経つとまた次の石がくる。三年の繰り返し。

但し「雨漏りを三年直さぬ馬鹿息子」という諺もそれとなく大事を示唆しています。

親子の情愛というものは明らかに他人とは別なものである事を教えながらすべて親が正しく間違いない訳ではない。そんなときは子として「父母に仕えては幾諫す」盲従ではなく親に對し諫めることも大事と説いています。

さてここで適切なのか、私の体験です。

手に持つこの一冊忘れ得ぬ大切なアルバムです。表題を「岐路」。

私二十才の時、五十一年も前のものです。

大圓和尚と同じく六人兄弟の末っ子五男坊です。姉一人。家は農家。父は本家の後継でないのといゆる村の地頭より借地して作物する年貢つきの小作人。豊かではない食うに事欠かなくとも現金に乏しい。口べらしをせねば生計が立たない。兄たちはよく極貧だったと謂う。私が小さい頃母に聞かされた話。「お前はいらなかった子。なんども畑の土手から飛び降りたがそれでもお前は生まれて来た。あの田圃がお前の誕生地だ。」ジョークだと思つても追い詰められている母の思いが伝わってくる。父の死は私十三才だった。のち母手によつて兄姉たちに救われ成長、兄たちは義務教育ののち働きながら苦学している。私はみんなの援助で何とか高卒まで甘えて苦学もせず私だけ学歴、学力を持つていない。兄弟たちは云う。「一家に一人馬鹿がでると謂う。それはお前だ」。苦学までし

て高卒以上の学歴を持つ兄弟たち、みんな秀才だった。

私が就職したのは昭和三十一年三月。戦後十年。時代は就職難。働けば何処でもなんでもよかった。鹿児島から大阪へ(株)成寿堂という小さな製造、卸の化粧品会社。聞いた事もない。女工さんと売り子。会社は大阪のど真ん中。全社員約五百名。年商八百万円というから規模は小企業。夢は一杯だった。入社して驚愕動転、二千坪位の敷地は一面焼野ヶ原、隔々にバラック式の建屋三棟。三年前に全焼、倒産、漸く再起。はじめての募集で入社した事になる。また何時倒産するかわからぬ事情。迎えた先輩「なんでこんな会社に来たんや」という。身を置く場所もない、私にとって入社は地獄でした。この有様を家や友人には語れない。仕方がない必要だから求めたに違いないと、とり敢えず諦める。入社式(二十八名)での社長の挨拶。会社



はご覧の通りだ。でも立ち直るのは早い。それを諸君に期待している。私は創業以来二十四年の間、二度も会社を潰した。今度は三度目の正直だ。昭和二十五年、二十六年は売上日本一。納税も業界一だった。いい時もあつた。それでも倒産した。私に徳がないからだ。これからの会社は商品を売るより「人を売る」すべて事業は人。人材がなければダメだ。同じ誤ちはしない。諸君にとって大事は「仕事より親孝行」と繰り返す。事業と親孝行、私の頭の中では繋がらない。

社長は親孝行がいかに大切か体験を踏まえあらゆる事例を並べ三日三晩どこか修養施設に隔離されているような、ドッキリと論語漬。混乱の私にこの境遇を理解する能力もまた受入れる用意も準備も持ち合わせていなかった。最後に告ぐという「親をよろこばせ、安心を与えた者



は破格の昇給、昇進を約束する。」と結んだ。

さあ大変だ、親が亡くなったら出世できない。

ボクの昇給のために「元気でいて欲しい。俄かに母のことが心配になって来る。実に単純明解。

業績は数字で出せる。しかし「親に孝」は数字が出ない。どうする。間もなく一週間後、東京支店に配属。新人は私だけ。初任給五千八百円手取り三千円位。これではうどん一杯、映画一本、見ることさえ難しい懐具合。兎にも角にも親をよろこばす方法はなにか。目に見えるあり方はなにか。これを実現出来れば「昇給」が約束されている。「オツカさん。ここが東京だよー」或るときラジオの歌が耳に届いた。これだー「母を東京に呼ぶ。そして見物」。早速郵便局に向き通帳をつくる。表記に「母の東京見物」と記した。今の時代なんでもない。旅行会社もない当時は大層なこと。

最低五万円が必要。旅費工面まで途方もない

時間と額のように思える。確かなことは始めの一円がなければゴールもない。

そんな一方安心はさせたくない。母には実状や会社の事情を大袈裟に書き送った。会社は潰れる、辞めたい、辛い、帰りたいと同情を求め続けていた。全く二重人格だったように思う。母の返事は唯々、帰るな、がんばれ、キバレの連呼。「お前は近所、隣に餞別をもらっている」と金の事を心配している。さて、志したら時間はかからない。目標が出来れば悪しきことなし。それまでの考えや行動まで一変する。休まない。ただただ働く。報奨金や残業。先輩の代わりはなんでもやる。殊に便所掃除に徹し、社内ではめた先輩の靴磨き、一回十円。町では五十円だったころ。この格安は評判を得た。そして感謝される。仕事の業績や信用まで急上昇。遂に七ヶ月目にして東京支店長に抜擢される。十九歳の新人を挙げ用いるなど大丈夫なのか。この人

事、普通ではない。私も周囲もそう思った。以来、立場と位置が変わり、経営思考に変革。よく「立場が人をつくる」というが身を以って体験する。これも随分のち気付いた。

「目標は五万の貯金」二年後通帳三冊。目標達成。「動機は美しくない。しかし心は日本晴れ」早速社長に事の子細を書き、貯金の額、一週間の休暇を申し出る。即答の電話「君はいいことをする。お母さんよろこぶだろうヨ。これまで社長の言うことを実行したものは一人もいない。褒美として貯金した二倍。休暇も二倍。これからの給料もボーナスも二倍にする。」耳を疑う。舞い上がるというよりしゃくり上げ涙が止まらない。二年も食わず飲まずコツコツ積み上げた五万円。一朝にして倍倍で返ってくる。社長はいう「親に出す金はスプーンではダメだ。背中がゾートするぐらいスコップで出せ」と。

母とは二年半ぶりだった。その旅行のことを

兄弟たちに報せる。すると「お前はいいことをする。末っ子のお前だけにふたんはかけさせられない。せめて旅費の一部にと」送られてくる。金子をアルバムに記しています。私は気が弱いから断れない。五万円、三万円、五万四千元、七万円、五万円。合わせて二十五万四千元。社長の十万円を上乗せすると突然私は億万長者になってしまったのです。親をダシにしたら金持ちになれる。ほんとの話です。東京駅で抱き合っただけ泣いた、母との再会。しわのなかに顔を埋め込んだ母。スッポリ手の中にはいつてしまうか細くなつた母。よろこぶというより泣いてばかりいた。「よか社長さんだネ。よか会社にはいつてヨカッタ。ヨカッタ。」と繰り返す。やがて落ち着き母が云う「あたいはひとりじゃないかよ」と。大粒の涙。胸に手を当て大事そうに着物の懐からとり出す白い包み。私に差し出したのです。ああ「父の位牌」。なんと、なんと

一人ではない。私は堪らず号泣してしまった。「このとき」私の父と母。その存在、その有難さ、その尊さを知った瞬間だったように思う。うまく表現出来ません。おそらくあの瞬間がなければ私は、「いまこ」にいません。

これは自慢話ではないのです。私が、欺いて「孝行」を企んだ一人芝居。しかし結果は瓢箪から駒。このところ私の理解と表現力では限界です。孝の道は「是か非か」「それでも親を敬し、孝を尽くすべきか」そういう次元ではなかったのです。「務本の学」は真の理でした。早や二十代半ばにして重役にまで挙げ用いられる始末。

社長から随分のちですが云われたんです。君のやったことは実にちっほけだ。ただ専一、親を思い一所懸命、貯金したことが尊いのだ。食わせ、呑ませ、養うは犬、馬でもする大事なことは「子とて親を敬愛し、違わぬ心」この心が

君自身を救い、君自身のためになることを知って欲しい。君の心は、はじめはウソだった。私は見透かされていた。でも「ウソからでたマコト」。これが君の運命を変え、また私自身も救われた。人をつくるという信念に自信を持たせてくれたこと忘れないよ。お陰で会社は上場の機運も見えてきた。君のマネをする社員も数え切れない。人も人材も信用も一杯戴いている。「アリガトウ」と社長に云われたことは私も忘れていません。親のお陰で私は変わった。社長の目論んだ「仕事より、会社より、親孝行が大事だ」商品売るより人を売ると云われた教訓は天地の理だった。この村岡社長こそ成寿山善光寺の開基です。「孝弟はそれ仁をなすの本か」。

善光寺霊園ニユース

横浜やすらぎの郷霊園

善光寺三十周年の記念事業の柱として開園した、横浜やすらぎの郷霊園。

マスクコミなどで供養の多様化が叫ばれる中、「本来に正しいものは時代が変わっても変わらない。」との理念で善光寺が責任をもって直接管理・運営をして十年が経ちました。

この十年、お墓参りに来られる方々の顔ぶれも変わってまいりました。開園当初にはご家族

を亡くされ、悲しみの中にいらした方々も既に七回忌を過ぎ、霊園内で交わす挨拶の声も元気な声になり、お参りされる表情もにこやかに、手を合わせていらっしゃる姿を拝見いたしました。とこちらも嬉しくなります。

また、しばらくお参りにお見えにならないなあとお思っていた方の訃報あり、御遺影に在りし日のお姿を浮かべる事もございます。

それぞれにご家族の構成も変わり、お参りに来られる方々の表情も様々です。

それでも皆様がわざわざ、お墓まで足を運ば

れて、仏さまと向き合う時間を作られる。そして、そこで語られる。命のつながり、ご縁のつながりに対しての感謝の念。追慕の念。お参りが終わった後の清々しさ、安心感。

安心はこころのやすらぎ。いくら時が流れてもやすらぎを求めるこころは永遠です。

やすらぎ通信

平成十八年より発刊している季刊紙です。この秋彼岸には十五号を数えました。

管理事務所からのニュースや善光寺の各行事のご案内・報告などの記事の他に、園内の四季折々の風景を載せています。興味のある方は霊園管理事務所に置いてありますのでお気軽にお持ち下さい。また善光寺の一斉法要でもお配りしております。



坐禅会・写経会のお知らせ

坐禅会

善光寺では毎月第一日曜日の早朝六時からと、第四日曜日午後三時から坐禅会を行っております。

早朝坐禅の後は、朝のお勤めをし、その後、禅寺の作法に従って、お粥を召し上がっていただきます。

午後の坐禅会は、育英会でご縁を頂いた藤田一照老師に坐禅指導と、その後『正法眼蔵』『行持』を提唱して頂いています。

これまでに坐禅の経験のない方、初心者の方

のご参加もお待ちしております。お気軽にご参加ください。



平成22年 善光寺坐禅会 年間予定表

■早朝坐禅会 毎月第1日曜日午前6時から

1月は、お休みです。	7月4日（ 〃 ）	午前 5:45 集合 6:00～ 坐禅・読経 7:00～ 朝食(お粥) 7:30～ 解散
2月7日（日曜日）	8月1日（ 〃 ）	
3月7日（ 〃 ）	9月5日（ 〃 ）	
4月4日（ 〃 ）	10月3日（ 〃 ）	
5月2日（ 〃 ）	11月7日（ 〃 ）	
6月6日（ 〃 ）	12月5日（ 〃 ）	

■日曜坐禅会 毎月第4日曜日 午後3時から 提唱：藤田一照老師「正法眼蔵 行持」

1月24日（日曜日）	7月25日（ 〃 ）	午後 3:00～ 体操(体ほぐし) 3:30～ 小休 3:40～ 坐禅 4:10～ 経行 4:20～ 坐禅 4:50～ 小休 5:00～ 提唱 6:00 閉会
2月28日（ 〃 ）	8月22日（ 〃 ）	
3月28日（ 〃 ）	9月26日（ 〃 ）	
4月25日（ 〃 ）	10月24日（ 〃 ）	
5月23日（ 〃 ）	11月は、お休みです。	
6月27日（ 〃 ）	12月26日（ 〃 ）	

場所：善光寺 釈迦殿

費用：無料

服装：ゆったりとしたもの。靴下は履きません。時計やアクセサリーは、はずしてください。

※参禅ご希望の方は、前日午後7時までにご連絡下さい。

写経会

お写経は、自らの信仰を深めるだけでなく、ご先祖の追善、あるいは諸願成就の祈りを込めて行う一つの修行です。

善光寺では月一回、左記にて「写経会」を開催中です。

どうぞご参加ください。

【日時】毎月第四金曜日（六月・十一月は休み）

午後二時より一時間半

【場所】善光寺不動殿

【読経】「般若心経」を全員で看読

【写経】引き続きお写経「般若心経」

【費用】 無料

平成22年

善光寺写経会年間予定表

1月22日（金）	7月23日（金）
2月26日（ㇿ）	8月27日（ㇿ）
3月26日（ㇿ）	9月24日（ㇿ）
4月23日（ㇿ）	10月22日（ㇿ）
5月28日（ㇿ）	11月は、お休み
6月は、お休み	12月24日（ㇿ）
午後	
2：00～	読経「般若心経」
2：10～	写経
3：20～	読経
3：30～	解散

※お手本・筆・硯・墨・写経用紙なども一式準備します。ご自分の道具を持参されても結構です。

※参加の方は準備の都合上、前日迄にご連絡下さい。

参禅会・写経会ともに連絡・・

善光寺 横浜市港南区日野中央一十二一九

(三二三四一〇〇五三)

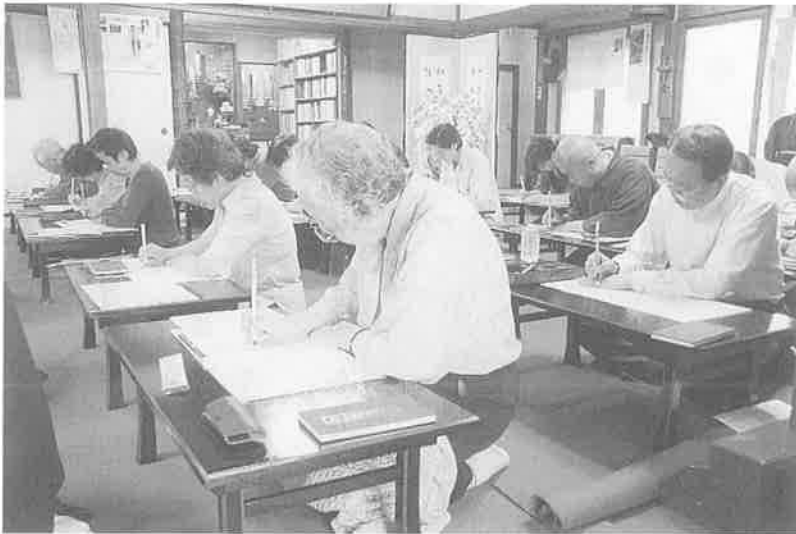
電話・・〇四五―八四五―一三七一

FAX・・〇四五―八四六―二〇〇〇

Eメール・・info@zenkouji.net

URL・・<http://zenkouji.net>

※参加の方は準備の都合上、前日迄にご連絡下さい。



育英会寄付者

■平成20年度

神奈川県 滝沢 孝子殿
南区 大森 キク工殿
磯子区 瀧澤 武雄殿
茅ヶ崎市 黒田 トシ殿
北海道 大粒来 和夫殿
港南区 南 有里殿
東京 関口 陽一殿

■平成21年度

港南区 伊藤 興郎殿
旭区 関 トミ子殿
神奈川県 滝沢 孝子殿
港南区 貞昌 院殿

平塚市 山口 義男殿
千葉 伏見 邦弘殿
大阪 東郷 敏殿
岐阜 松原 克子殿
愛知 崎山 邦夫殿
磯子区 越石 周平殿
兵庫 東郷 公殿
東京 和田 正哉殿
港南区 増山 静江殿
金沢区 平 哲夫殿
千葉 岩井 文子殿
綾瀬市 新館 果殿
青葉区 佐々木 宏幹殿
茅ヶ崎市 原 美津子殿
南区 阿部 俊之殿

〈成寿賛助〉

■平成21年度

宮城 玄光 庵殿
港南区 貞昌 院殿
戸塚区 福泉 寺殿

いつもご寄付賜りありがとうございます。
ございます。



一 齊法要の報告

恒例の山内行事

今年も例年通り年五回の一齊法要を執り行いました。天候にも恵まれ境内にはたくさんの方がご参詣下さいました。

一月九日（金） 新年祈祷会

お話は、カリフォルニア大学バークレー校教授のダンカン隆賢ウィリアムス先生。ダンカン先生は善光寺留学僧育英会の第十四回育英生。先代の住職が団長を勤めたスリランカ国交樹立五十周年記念友好親善使節団にも参加し通訳を務め、博志住職がアメリカに修行に行った際にはご自宅に一ヶ月間ホームステイさせて頂くなど、親子二代に渡って親しくお付き合いをさせ

— ニュース・アラカルト —

て頂いている方です。アメリカ、オバマ大統領のチェンジをキーワードに流暢な日本語でお話を頂きました。ダンカン先生は今年より再開しました育英会の参与もお勤め頂いております。また同じく育英生の新井一光師（第二十一回生）が帰国のご報告に來山し、檀信徒の皆様にご採用して頂き、挫けそうな時にこの育英会に採用して頂き、大変勇気を頂きました」とお礼の挨拶をされました。



ウィリアムス先生

二月三日（火） 節分追難法会

落語。二遊亭王楽さんと二遊亭きつつきさんと二人の落語を楽しみました。

さすが王楽さん。三年続けて善光寺での落語。そのご利益あつてかこの秋、真打昇進。会場からは「真打！」との掛け声も。ますますのご活躍を祈念致します。その前を努めたきつつきさん。頑張つて、精進ください。

落語が終わつてご祈祷。転読大般若、善星皆来、悪星遠離、諸災消除を祈念。大きな声で魔を払いました。そして、待望の豆まき。

三月十八日（水） 春彼岸法会

午前、午後合わせて六百名の皆様のご参詣。

お話は、ドイツ普門寺住職 中川正寿老師。冒頭には、尺八の音色。

キリスト教の社会に身をおいて一から仏法を伝える。その理念に共鳴し先代も影ながら協力を

ニュース・アラカルト



ドイツ普門寺住職 中川正寿老師

をさせて頂いた老師です。二〇〇六年には普門寺開創十周年と中川老師の晋山式が行われ、博志住職も随喜致しました。（詳しくは成寿34、37号をご覧下さい）

お話のテーマは「何の為に生きるのか」。ドイツで行っているプログラムを紹介。「ドイツのお寺の中から窓の外を見れば、どの木を見ても頑張つて伸びている。けれどどれ一つとしてまっすぐな木はない」と語られていた老師の横顔に、文化の違いの中でも、「坐禅の心をどう伝えるのか」という事に心を尽していらつしゃる老師の情熱が感じられました。

六月二十六日（金）、二十七日（土）

孟蘭盆大施食会

二日間に渡り八百五十名を越す方々のご参詣。

駒澤大学名誉教授の佐々木宏幹先生から供養について分かりやすいお話を頂き、身近な方とお別れについてその絆をしっかりと保つ時間を持つ事が出来ました。

ニ ュ ー ス ・ ア ラ カ ル ト

九月二十一日（月） 秋彼岸法会

秋の大型連休の中、六百名を越す方々のご参詣。第二回育英生大阪乗雲寺の安井住職（浄土宗）のご法話。インドへの留学中に育英会の事を知り申し込み。先代住職がわざわざインドまで激励に来て、「お金の事など心配するな。きちんとした事を続けていけば必ず道は開かれる。君は好きなように遣つたらいい」といわれた善光寺との縁を交え、「般若心経」について「今日、ここ善光寺にお参り出来るだけで皆さんベースト・コンディションですがな」と関西弁でユーモアたっぷり四十五分のお話を頂きました。



安井住職

山内の整備

お陰様で年々お参りいただき檀信徒の皆様の数が増えています。

昨年にはご一緒にお勤め頂く為にお配りするお経本が足りなくなるほど。

皆様、お参りして頂きやすいようにと山内整備を行っています。

駐車場 今までは、釈迦殿前の場所に駐車して頂いていましたが、二月に米陀石材店様の脇に大駐車場が完成しました。是非ご利用下さい。

釈迦殿 空調・御手洗の整備。釈迦殿建立から三十年。当時の空調が不調の為、この夏に入替。また女性の参拝者が多い割に御手洗の数が少なくご迷惑をお掛けしていた為御手洗の改修も行いました。

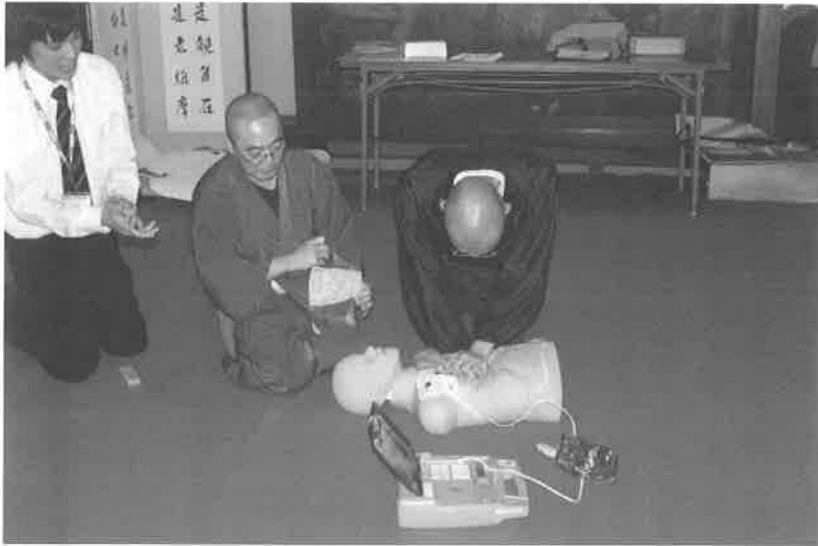
ニュース・アラカルト

AED設置

釈迦殿の玄関左側にAEDを設置致しました。それに先立ち使用方法の講習会を五月二十八日近隣の方々も招いて行いました。

AEDとは今年の東京マラソンでタレントの松村邦弘さんが倒れた際にポランティアの方が使用して注目を浴びた事でも知られる医療機器です。

心臓の突然死はいつでも誰にでも起こる可能性があります。その数は年間全国で三〜四万人(二日百人)とも言われています。心臓突然死の原因は心室細動といわれる心臓が痙攣している状態からくるものです。この心室細動は発生から1分経過する毎に心拍再開率は約一〇%ずつ低下していくそうです。そのために、救急車



AED講習

ニ ユ ー ス ・ ア ラ カ ル ト

が到着する前（全国平均到着時間は約7分！）に現場に居合わせた私たち一般市民による心肺蘇生＋電気ショックが必要になる訳です。そのため、二〇〇四年から一般市民による使用が認められ駅や空港、ホテルなど公共施設に広く設置されるようになりました。

※AED 自動対外式除細動器（じどうたいがいじょせいじんぐき Automated External Defibrillator）心室細動の際に機器が自動的に解析を行い、必要に応じて電気的なショック（除細動）を与え、心臓の働きを戻すことを試みる医療機器。尚、脳出血など、心室細動以外の要因で倒れた際には、機器が自動判断して、電気的ショックは流れません。

◇◇◇◇◇救急時のガイドライン◇◇◇◇◇
1 意識の確認 肩を叩いて意識の確認。「大

丈夫ですか？聞こえていますか？」

2 救急車、AEDの依頼 助けを呼ぶ。周りの人に指示をだす。お願いする。「一一九番で救急車を呼んでください。」など具体的に指示する。

3 気道確保、呼吸の確認 あごを上げ気道の確保、口元に頬をよせ呼吸の確認

① 胸部の上下運動を見る

② 呼吸があるのかを音で聞く

③ 頬で息を感じる

4 二回の人工呼吸（省略可）

5 胸骨圧迫、人工呼吸

① 服を脱がせ、乳首と乳首の間に手のひらの付け根を置く。

ニュース・アラカルト

② 一分間に百回のリズムで三十回胸骨圧迫を行う（四〜五cmの深さで圧迫）。意識が有れば、痛いと思われるほどにかなり、強く押す感覚です。

③ 気道を確保し、ゆっくりと二回人工呼吸を行う（一回に一秒）

④ 三十回の胸骨圧迫と二回の人工呼吸を五セット行う（約二分間）

⑤ AEDが到着しだいAEDを使用

ふたを開ける（電源を入れる）電極を貼る（右の鎖骨の下と左の脇腹）電気ショックが必要な場合は、放電ボタンを押す

『救命の手順二〇〇五年新しい日本版救急蘇生ガイドライン』

「自分たちの手で救える命があるならば……。」「万が一、目の前で人が倒れたときに慌てずに

対処できるように参考までにご確認ください。

戸澤洋太師 法戦式

去る六月二十二日、加賀大乘寺にて東隆眞老師を法幢師として善光寺徒弟、戸澤洋太師の首座法戦式が行われました。厳肅な雰囲気の中、ご両親や師匠である博志住職の見守る前で、十間に渡る問答を大きな声で行いました。「まだまだ大乘寺に残って修行を続けたいと思います」と語る洋太師の今後益々の活躍を期待し、心より道念増長、法身堅固を祈念致します。

ニュース・アラカルト



戸澤師



〔目的〕

儒教を修学する者のうち、学業操業ともに優秀にして身心堅固なものを海外に派遣し、または海外より日本国内に受け入れ、佛教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る有為な人材を育成することを目的とする。

〔派遣先〕

1. Zen Center of Los Angeles (LA 禅センター)
"923 S.Normandy Ave., LA., CA90006U.S.A"
2. Zen Mountain Center of NewYork (NY 禅センター)
"Box197,Mt.Tramper,NY12547U.S.A"
3. Zen-Zentrum Eisenbuch (アイゼンバッハ・禅センター)
"Eisenbuch 7 D-84567Erlbach Deutschland Germany"
4. WatPaknam (ワットパクナム)
"Bhasichareon Bangkok, 10160 Thailand"
5. 理事会において必要と認めるその他の国に所在する研究機関、並びに国内仏教関係大学及び寺院

〔派遣期間〕

平成23年4月より1年間

〔給費〕

アメリカ・タイおよびその他の国における滞在に要する
必要経費並びにその往復旅費

〔提出書類〕

1. 論文(次項による)
○論題
①これからの国際興隆と仏教の役割
②世界平和と仏教徒の誓願
③留学僧として私はこれを学びたい
④異文化の中で仏教を学ぶ
いずれか一題を選ぶこと 400字詰原稿
用紙5枚以上(A4判タテ書き)
2. 保証人と連署した願書
3. 卒業証明書
4. 履歴書
5. 推薦書
6. 健康診断書

〔募集人数〕

平成23年度若干名

平成22年12月10日、事務局必着のこと

〔発表〕

平成23年1月10日、本人に通知する

横浜善光寺留学僧育英会

〒234-0053 横浜市港南区日野中央1丁目12番9号
TEL.045-845-1371 FAX.045-846-2000

第 24 回 生

横浜 善光寺 留学僧募集

平成23年度・2011

横浜善光寺留学僧育英会は、海外留学僧を募集いたします。

ご希望の方はご応募ください。

詳しくは、宗教法人横浜善光寺留学僧育英会の
規程ならびに細則をごらんください。



ZENKŌJI
YOKOHAMA

◇晋山結制並びに先住大和尚七回忌法要のお知らせ◇

善光寺二世中興大圓武志大和尚の遷化からはや七回忌を迎えようとしています。善光寺の創建、「留学僧育英会」の設立、やすらぎの郷靈園の開設、世界を舞台にした国際的な活躍等々、大圓大和尚の足跡は、仏教に生きる私たちにとって、今も大きな指針となり生き続けています。

善光寺は今、大圓大和尚の遺志を体して第三世を継承した黒田博志が先代大圓大和尚の七回忌に際し、成寿山善光寺住職として就任を正式に披露するための晋山式を挙行する準備を進めています。新任職としての決意を込めて晋山上堂の盛儀に臨む覚悟です。ここにお知らせいたします。

日時 平成二十二年十一月二十七日（土曜日）～二十八日（日曜日）

晋山式しんざんしきは、新しく任命された住職の就任式でありお披露目の式であります。

また「結制法要けっせいほうよう」は住職が最高の法階である大和尚への道のりの第一歩という儀式で、世界の平和と万民の幸福を祈ると共に、禅問答など多くの法要が両日に亘って修行されます。

これらは曹洞宗の儀式の中でも最も重要なもので、住職にとって生涯ただ一度の式典でもあります。



昭和47年11月28日



善光寺二世中興大圓武志大和尚の晋山式（晋山上堂の盛儀に臨み、須弥壇上で拝を受ける）

檀信徒にとっても、遇い難き良い縁起であり因縁であります。

準備委員会 委員長 熊谷豊太郎

副委員長 國廣 敏郎

役員一同

〈主な法要行事〉

- 一、晋山稚児行列（しんざんちこぎようれつ）
- 一、晋山式（しんざんしき）
- 一、晋山上堂（しんざんじょうどう）
- 一、首座法戦式（しゅざほっせんしき）
- 一、先住大圓武志大和尚忌七回忌
献供諷経（けんくふうぎん）
- 一、大般若祈祷（だいはんになきゃきとう）

……等

※檀信徒の皆様には、

改めてご案内申し上げます。



お慶び申し上げます

前田恵學先生
愛知県

大圓武志大和尚のお亡くなりな
りなつたあとも立派に遺志を
お継ぎ下さり、その言葉を
着々とお進めになつてい
る様を拝見して心からお慶び申
し上げます。

五十周年

常眞寺住職 皆川廣義老師
栃木県

大圓武志大和尚のあとを立
派に継がれて大和尚も安心し

ておられることと存じます。
私の「緑蔭禪の集い」も今年
で五十周年を迎えることがで
きました。武志さんが大学院
生の頃お会いし、光眞寺を会
場として始めた運動でした。

老師のご意志が伝わる

佐々木宏幹先生
横浜市

「成寿」楽しく拝読してお
ります。先代武志老師のご意
思が確実に伝えられているこ
とをお慶び申し上げます。

博志師の国内外のご活動に
先代様はきつと莞爾としてお
られるに違いありません。ま

すますのご活躍をご祈念申し上げます。

御支援に感謝いたします

世田谷区

吉津宜英先生

御遷化の前年に駒澤大学仏教経済研究所をベースにした西村祐子教授の国際交流プロジェクトに御支援を頂戴しました。心より感謝しております。博志方丈様の下で善光寺様の益々の御隆昌を祈念いたします。

大学時代の武志師の姿

長野県
小笠原隆元老師

拙僧は昭和三十一年四月に駒澤大学に入学して竹友寮に入っておりますが同期生として故黒田大圓武志師が颯爽と風を切つて学内を闊歩しておりました姿が眼の底に残っています。多くの師、法友に恵まれての大活躍をしのびつつ、善光寺のますますの寺門・寺檀繁栄を念じ上げます。

現代社会に一筋の光明を

静岡県
少林寺住職 井上貫道老師

成寿の三十九巻を手に黒田武志大和尚様を偲んでおります。早いものです。四年目、頂相二幅は見応えのある立派なものです。胡建明様の思ひも十分に込められている様に拝しました。現住職黒田博志方丈様には、よき伴侶をめとられ先ずは心よりお祝詞を申し上げます。先師のご意志を継がれてのご活躍本当にこの上なくたのもしい限りです。お力を合わせ

て混迷する現代社会に一筋の
光明を灯して頂けることをま
ねは出来ませんが敬意をささ
げ微力ながら一歩でも続けた
らと思う次第です。

なつかしい笑顔

秋田県
松庵寺住職 渡邊紫山様

小柄の故郷信州善光寺、興
国寺の記事なつかしくペンを
とりました。水野老師は長野
高校吹奏楽班でクラリネット
を吹かれた先輩でした。お元
気そうな笑顔、倫子奥様もお
変わりない若さに驚きました。

光真寺のおばあさまとロス
禅センター来山の時、カタリ
ナ島にご案内してとてもお喜
びだったこと等を思い出して
います。「臥龍山」の山号額
の格調高き筆勢に身がひきし
まります。精進せねば……。

御意思は御堂と共に

千葉県
山崎康弘様

頁をめくりながら、武志大
和尚が御存命の時と変わりな
い善光寺の日々が営まれてい
るのだという感想をもちまし
た。

お姿はございませんが武志

大和尚の御意思は御堂と共に
いつもあるということだと思
いました。ご活躍を期待致し
ます。

感激！ 激励！

横浜市
戸塚正美様

「成寿」拝読、良くやりま
した。エライ！

ご結婚おめでとうございま
す。ヨカッタ！

東大兄の式師に山口老師の
ご媒酌とはスゴイ！

母上様もお喜びでしょう。
ガンバレ！

来年の三心会は大八木兄の

地元幹事で善寶寺へ。また、黒ちゃんの思い出話をさせていただきますよ。

育英会再開に快哉

多福院住職 島崎義孝老師
京都府

先般は久しぶりに善光寺様に拝塔し、途中からではありましたが、式にも列席させて頂き誠に有り難うございました。先住職武志和尚様が起された留学僧育英会が再開したことに快哉を叫ばずにはおられません。後継の博志和尚様の御導師ぶりも立派で感服しました。

善光寺様を通じてこれまで頂戴してまいりました御恩・御縁を大切にし、不肖なりに四弘誓願を行じて参りたいと存じます。感謝の気持ちの一端を述べさせて頂きます。誠にありがとうございます。

御支援に感謝

清水晶子様
福岡県

予定より少し分長くかかってしまいました。が昨年末ロンドン大学に提出したジャイナ教徒の宗教生活に関する博士論文が正式に受理されました。

ケンブリッジ大学の社会人類学科で MPhil 取得後ロンドン大学キングスカレッジの神学・宗教学科に移籍して Prof. Friedhelm Hardy の下で論文をまとめておりました。二〇〇四年その教授が突然亡くなられた最後は SOAS a Jain Centre a Chair. ODr. Peter Flugel の指導で論文を完成しました。イギリス留学中は紆余曲折がありました。が志を貫徹できましたことこれもひとえに善光寺様はじめいろいろな方々のご支援の賜物と心より感謝致しております。黒田大圓先生、中村元先生そして阿部慈園先生に直接

ご報告できなかったことが何より心残りに思っております。

ロスから

アメリカ・ロサンゼルス

阿満道尋様

先日、第二十二回育英会資料をいただきました。ありがとうございます。私事ですが、二〇〇七年に無事カリフォルニア大学アーバイン校でPh.D.をダンカン・ウイリアムス先生のご教示のもと、取得することができました。現在は同校と University of the West というロサンゼルスに

ある中国系の仏教大学で非常勤をしています。関係者は是非、善光寺のすばらしい奨学育英制度を紹介したいと思っております。またお目にかかることができれば幸いです。今後ともよろしくお願い申し上げます。

総代のお言葉に感銘

兵庫県

東郷優様

大圓武志大和尚の頂相点眼法要を拝見しました。

檀家総代熊谷豊太郎様のお言葉に只々感銘服従するのみでした。仏門を代表する各住

職さまのお力添えに答えられるように檀信徒一人一人、自信を持って励みたいと思いました。

おめでとうございます

成寿三十九号、すっかり一行のもれなく拝読しました。

倫子さん、貴女が二十歳の始め、会社に入社された頃は会社も小さく、死に物狂いでしたね。黒田先生を知り、父上の加藤照雄老師が永平寺単頭の頃、私、人事担当として、永平寺に数回参禅教育に新入社員を引率しました。加藤老師に大変お世話になりました。

それからご結婚、善光寺建立と次から次へと難問課題、新工場建設、工場長になり、あの頃は三人前働いても足りぬ忙しさでした。工場内にある成寿殿に佛壇を入れて頂きました。黒田先生の思い出は平凡な、そして厳しいお姿でした。博志さん、ご結婚おめでとう、あせらず迷わず只一心に母、兄弟を助けて下さい、頼みます。

慧眼に感服

兵庫県
安部嘉明様

檀家総代の東郷敏様より成

寿第三十九号を送って頂きました。東郷様とは同じナリス化粧品に勤務して多々ご指導頂いた先輩です。論語の講演をされている内容を興味深く拝読しました。かくいう私も村岡満義社長から論語の教育を受けて今日に至っていると感謝している一人です。私はナリス化粧品在勤時代神奈川県（厚木市）の四年間の間、幾度か善光寺にも伺い黒田武志様にも親しくお目にかかりました。が人間的度量の大きさを感じ啓発を受けました。（昭和五十三〜五十六）黒田武志大和尚や東郷敏総代のような偉大で立派な人物を見抜かれ

ていた村岡満義の慧眼にもあらためて感服しております。

表紙に見つけた伊藤先生

千葉県
藤田正子様

今日「成寿」三十九巻が届きました。いつもの如くドキドキしながら袋を開くと、表紙は又もや故伊藤三喜庵先生の、これも又なつかしい御作品……。しばし無言のうちにこれを描かれていらした頃を思い出し、感無量となりました。ページを次々と開き、ご住職様の亡き御父上に対する想いを書いていらつしやる御言葉

を読み、本当に御立派な御父上、又現住職も成長なされた。しみじみ感服させられ幸せをいただきました。御結婚おめでとうございます。更によりしく御指導下さいますようお願い申し上げます。

三十年前とお変わりなく

恩田通子様

三十九号では「頂相のご紹介」で二幅から三十年前にお会いしたお若き日の御父上の御尊顔をお懐かしく拝見させて頂きました。ありがとうございます。又、三十一頁に

御母堂倫子様のにこやかなお姿をうれしく存じました。(御母堂様へおよろしくお伝え下さいませ)三十年前にお会いした頃とお変わりなく拝見いたしました。善光寺様の一層のご発展をお祈り申し上げます。

ふさわしいご活躍に感激

今回の思い出の中に「善光寺の新たなスタート」との特集号を拝見し博志御住職様のすばらしいご活躍に大圓和尚様も天国で喜んでおいでの

ことと存じます。

黒田武志大和尚様の頂相は大変見事でほんとに立派な祖師であられることが後々まで語り継がれることと思われます。巻頭のお言葉の中に故武志大和尚様が御息の博志御住職様に遺されたお言葉が非常に印象的でした。そのお言葉にふさわしい博志御住職様のご活躍に対して感激いたしました。



五世觀音菩薩像
中國敦煌三窟

沙
金
卷

編集後記

▼成寿四十号も多くの方のご至誠ご協力を頂き無事発刊できました。厚く御礼申し上げます。

▼去る平成二十一年十一月二十六日大本山總持寺副貫首齊藤信義老師様が御遷化なされました。六月に善寶寺参拝団でお参りさせて頂いた際には、心暖まるおもてなしを賜わり、また夕刻、旅館での宴席にまでご臨席を賜りましたこと誠に感激致しました。その際、ご老師様より、師父の思い出や育英会設立当初の経緯などをお話頂き改めて師父の交流の広さ、深さを感じました。今後も老師様よりお示しいただいた慈悲の心を大切に精一杯精進して参ります。生前のご法愛に深謝し、謹んで哀悼の意を表します。

▼三年ぶりに横浜善光寺留学僧育英会の辞令交付式を行う事ができました。再開にあたり、多くの方にお力

添えを賜りました事心より感謝申し上げます。また、多くの育英生の方々にご臨席頂きました事、またお忙しい中、お気持ちのこもったお手紙を頂戴いたしました事深く感謝申し上げます。

▼育英会で頂いたご縁が更に広がりをみせ、各界で活躍をされている方々が善光寺の檀信徒の皆様にお話をさせて頂きました。明年一月九日(土)の新年祈禱会には第三回の留学僧の鳥崎義孝師よりお話を頂く予定です。

▼向寒の砌、どうぞ御身体に御留意いただき佳きお年をお迎えください。



お詫びと訂正

本誌三十九号の八頁に誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

誤 八月十六日

正 八月吉日

誤 栢樹林

正 椋樹林

誤 大乘寺東隆眞敬賛

正 大乘寺主隆眞敬賛

成寿 第四十巻

平成二十一年十二月二十日発刊

発行所 成寿山善光寺

横浜市港南区日野中央一丁目

十二番九号

電話 〇四五(八四五)一三七一

FAX 〇四五(八四六)二〇〇〇

印刷所 (株)中外日報社



